

“Ost=Asien”における森鷗外『舞姫』（宇佐美濃守独訳）

Mori Ohgai “Maihime” in “Ost=Asien” (A Germann Translation by Usami Nomori)

泉 健

Ken IZUMI

2007年10月5日受理

序

1. 宇佐美濃守独訳『舞姫』

筆者は、“Ost=Asien”という独語月刊雑誌の研究を、これまで様々な角度から行ってきた。本稿もその一環として『舞姫』を考察していく。しかし本稿は『舞姫』の作品論でもないし、また森鷗外に関する作家論でもない。本稿の主たる内容は以下の3点である。まず、1908-1909年(明治41-42)にそれをドイツ語に翻訳した宇佐美濃守という人物を解明すること。次に、それが掲載された“Ost=Asien”の当時の編集長老川茂信と宇佐美濃守との関係を明らかにすること。そして最後に、この宇佐美訳の全体を復刻することである。

従って、本稿は『舞姫』の作品論、作家論の面では、日本近代文学研究に貢献するところは少ないであろう。しかし、テキスト・クリティークの領域における新資料の発掘という面においては、森鷗外研究に何らかの役割を果たすものと考えている。というのも、この宇佐美濃守訳は、『舞姫』の各版を詳細に研究した長谷川泉氏の一覧表(長谷川泉 1991: 414-415)にも掲載されていないからである。この独訳が日本に紹介されるのは、おそらく本稿が初めてであろう。

2. “Ost=Asien”の概要と玉井喜作

本論に入る前に、筆者のこれまでの研究の経緯を簡単に振り返り、本稿とのつながりを明らかにしておきたい。筆者がこの一連の“Ost=Asien”研究で明らかにしようとしている最終的な目標は、世紀転換期のベルリンにおける日独文化交流の一端を明らかにすることによって、相互の異文化受容の様相を浮かび上がらせるということである。特に筆者が関心を寄せているのが、日本の演劇の上演において、日本の伝統音楽がベルリンでどのように受容されていったかということである。

そこでこれまでに、まず“Ost=Asien”という月刊雑誌の概要を把握することからこの研究を始めた。すなわち全139号の目次を翻訳し(泉健 2002)、オリジナルのドイツ語の目次の復刻を行い(泉健 2004b)、全目

次の人名索引を兼ねて外国人(泉健 2003)と日本人(泉健 2004a)の人名注解を行った。次に、この雑誌の創刊者である玉井喜作のことを3回に分けて調べた。玉井は、1894年(明治27)2月から約12年半あまりをベルリンで過ごし、1906年(明治39)に同所で亡くなった。そこでまず、1999年に2度ベルリンに行き、玉井の足跡を調査した(泉健 2005a)。次に、玉井に関する二次資料(書籍・新聞記事・雑誌論文など)を整理、紹介し、それらを基にして彼の生涯の再構成を試みた(泉健 2006)。そして、同じく玉井に関する一次資料(日記・私信・写真など)を基に、さらに彼の具体的な人間像を浮かび上がらせてみようとした(泉健 2007)。

以上の経緯は、筆者の最終的な目標のいわば外堀を埋めるような作業であり、今回からこの雑誌の具体的な内容の解明を行っていききたい。この雑誌の正式な名称は“Ost=Asien. Monatsschrift für Handel, Industrie, Politik, Wissenschaft, Kunst etc.”、すなわち『東亜：貿易、産業、政治、科学、芸術などのための月刊雑誌』というものである。タイトルの示すとおり、内容的には貿易、産業、政治、経済、歴史などの分野の記事が中心となっている。しかし、それらに比較すると数は少ないものの、文学、演劇、美術、音楽などの記事もかなり含まれている。従って、これは一種の月刊総合雑誌に近いものと言える。サイズはB5版で、毎号およそ50頁前後の頁数で構成されている。“Ost=Asien”はこのような体裁の雑誌である。

世紀転換期のベルリンにおける日独文化交流の一端を明らかにするために、筆者は、この中でまず文学の領域に注目した。同誌の中には森鷗外に関係する記事がいくつか含まれている。一つは『舞姫』の独訳である。今ひとつは、短編『花子』の主人公である太田花子(本名は太田ひさ)一座がベルリンを訪れた時の記録である(泉健 2004a: 57)。今回はその中から『舞姫』の独訳を取り上げてみたい。森鷗外は、1884年(明治17)から1888年(明治21)までドイツに留学し、帰国後の1890年(明治23)に『舞姫』を発表した。

I. 森鷗外『舞姫』

1. 研究史

近代国文学研究の領域において、森鷗外に関しては実に多くの緻密な研究が行われており、微にいきり細に入り、すでに膨大な量の文献が存在している。例えば『長谷川泉著作選④ 鷗外文献集纂』(長谷川泉 1993)には、5104項目の文献が挙げられている。これは長谷川泉氏が、森鷗外記念館の機関誌『鷗外』誌上に連載してきた鷗外研究文献紹介の内、1970年から1992年までのものをまとめたものである。それ以降15年を経た今日、文献数はさらに増えている。コンピュータ検索により、国立情報学研究所の論文情報ナビゲーター(CiNii)で「森鷗外」を調べてみると(2007年8月30日現在)、1993年以降現在までの15年間のものだけでも932件の文献が存在している。

また『舞姫』一つ取り上げても、長谷川泉「『舞姫』の顕匿」に付された「『舞姫』参考文献」(長谷川泉 1992: 229-267)には、1966年末のものまでの538件の文献が挙げられている。これも同じくCiNiiで『舞姫』を検索してみると(2007年8月30日現在)、1967年以降現在までの文献が353件あることがわかる。CiNiiに載録される文献は、大学の紀要論文や雑誌論文が主であり、長谷川泉氏が委細漏らさず取り上げている新聞などの小さな記事は含まれていない。それだけに一層その数の多さに驚かされる。

これまで、森鷗外に関して雑誌の特集や論集が組まれたことも数多く、その一部は『長谷川泉著作選④ 鷗外文献集纂』にまとめられている(長谷川泉 1993: 835-837)。例えばその中の一つである「特集・鷗外—その表現の神話学」(『国文学』1982年7月号)には、「『舞姫』諸説集成」(重松泰雄 1982)として、テキスト、モチーフ・成立因、主題、方法・構成、文体、比較文学的研究の各領域にわたっての研究史がまとめられている。また「鷗外研究の現在」(蒲生芳郎 1982)には、歴史小説研究、鷗外の評論活動に関わる研究、比較文学的研究、医事関係の業績に関わる研究などの各研究領域の展望とともに、『舞姫』についての諸家の言説も紹介されている。

特に「『舞姫』の記号学」(山口昌男・前田愛 1982)では、この作品を従来のように森鷗外の個人史と関連させて捉えたり、近代自我の目覚めを書いた最初の作品として捉えるのではなく、都市論的視点から記号論的に分析していくという前田愛教授の新しい見解が紹介されている。この解釈は、この雑誌の2年前に発表された同教授の論文「ベルリン1888年—都市小説としての『舞姫』」(『文学』1980年9月号)で提示されたものであった。そしてこれは、2年後に「BERLIN 1888」と改題されて、同氏の『都市空間の中の文学』に収められている(前田愛 1982)。さらに山崎一穎教授は、

その解釈を視覚的イメージによってわかりやすく図示している(森鷗外・井上靖訳 1982: 筑摩文庫版p.91)。

あまりにも先行研究が多い分野は、研究対象としてはとかく避けがちになるものである。西洋文学研究者にとってのシェークスピア、西洋音楽研究者にとってのバッハ、J.S.がその例であろう。森鷗外研究に関しても、これだけの量の先行研究を前にすると、それに似たような感じに捉われる。ましてや近代国文学に関しては全くの門外漢である筆者が、屋上屋を架するような文献をこれ以上増やしても意味がないであろう。しかし序で述べたように、今回紹介する宇佐美濃守の独訳は、これまで日本では紹介されていないようである。その意味で、『舞姫』のテキスト・クリティークを行う場合には、本稿もそれなりの役割を果たすのではないかと思われる。そこで、今回ここに取りあげるような次第である。

2. 『舞姫』の外国語訳

森鷗外はドイツから帰国後、『舞姫』を『国民の友』第6巻69号(1890年/明治23、1月3日発行)の付録に、鷗外森林太郎の署名で発表した。鷗外自筆の「舞姫」草稿全文と『国民の友』付録の原文は、『現代訳 森鷗外「舞姫」』(森鷗外・安川里香子訳 2001: 69-147)で読むことができる。第二次世界大戦以前までに限った場合、長谷川泉氏の研究によれば、『舞姫』の外国語訳には英語訳(森鷗外・Eastlake, F.W. 訳 1894)、ロシア語訳(森鷗外・二葉亭四迷訳 1908)、ドイツ語訳(森鷗外・小池堅治訳 1917)があることがわかる(長谷川泉 1991: 414-415)。

英語訳は、鷗外の原著発表からわずか4年後の1894年にすでに出されている。ロシア語訳の出版は、原著発表から18年後になる。そして小池堅治訳のドイツ語版は、原著発表から27年後ということになる。ところが、この長谷川泉氏のリストには欠けているが、ここに今一つドイツ語訳が存在しているのである。それが宇佐美濃守訳である(森鷗外・宇佐美濃守訳 1908-09)。

宇佐美訳は、1908年から翌1909年にかけて、ベルリンで発行されていたドイツ語の月刊雑誌“Ost=Asien”に全12回にわたって連載された。1908年は、二葉亭四迷のロシア語訳が出た年である。従って、これも原著発表から18年後の翻訳である。ただ上記の英語訳、ロシア語訳、ドイツ語訳と違って、宇佐美訳はドイツ語圏での発刊である点に特徴がある。

II. 宇佐美濃守とは

1. 既述の2つの資料

1) ハルトマン名簿

それでは宇佐美濃守とはいかなる人物なのであろうか。筆者はすでに3年前に、彼のことを一度紹介した

ことがある（泉健 2004a：56）。この時点で宇佐美濃守に関して入手できた資料は、ハルトマンのベルリン大学日本人在籍名簿（Hartmann, Rudolf 1997：66、以下ハルトマン名簿と略記）とベルリン独和会会報の20周年記念号につけられている会員名簿（Anonym 1910：109）のみであった。後者は、筆者がボン大学図書館の書庫で見つけたものである。ここで再び、3年前の記述の一部訂正を含みつつ、この2つの資料に基づいて彼の足跡をもう少し詳しくたどってみると次のようになる。

まず前者によれば、宇佐美はベルリン大学に、1905年（明治38）から1911年（明治44）まで通算7年間在籍している。その間、1905年夏学期から1909年の夏学期まではドイツ語を、また1909年夏学期から1911年冬学期までは歴史学を、それぞれ専攻している。さらに第一次世界大戦が勃発した1914年（大正3）には、ベルリン大学付属ベルリン東洋語学校の日本語講師となっている。住所は、この間ずっとBerlin, SW, Hallesches Ufer 25であったことがわかる。これは“Ost=Asien”の編集事務所があったSW11, Kleinbeerenstr. 9から、歩いて10分もかからないくらいの所である。

2）ベルリン独和会会員名簿

また、後者のベルリン独和会会報の20周年記念号は、1910年12月号であり、付録の名簿は次の4つの区分から成り立っている。A. 名誉会員3名、B.（ベルリン在住の）正会員85名、C.（ベルリン以外の一外国も含む）正会員101名、D. 研究所・博物館など6組織。

宇佐美の名前は、Bのベルリン在住の正会員の欄にあり、身分は学生、専攻欄には“phil.”と記されている。これは哲学専攻の意味ではなく、哲学部の意味であろう。ドイツの大学の哲学部は、文系の総合学部であり、歴史・哲学・心理学・社会学・美術史学・文学・言語学など多岐にわたる内容を含んでいる。

この名簿では、彼の住所はSchöneberg, Königsweg 14と記されている。この会報の出版された1910年12月は、宇佐美のベルリン大学在籍6年目の後半にあたっている。彼は1909年の夏学期以降、新たに歴史学を学ぶことにした時点で、既述のBerlin, SW, Hallesches Ufer 25の住所を大学に再び届けたと思われるが、それ以降この新たな住所に引っ越したのであろう。

“Ost=Asien”誌に連載した『舞姫』の独訳の初回は1908年（明治41）1月号No.115であり、最終回は1909年（明治42）4月号No.129である。従ってこの仕事は、彼がベルリン大学に在籍していた3年目の冬から4年目の冬にかけてのものであったことがわかる。森鷗外が原著を『国民の友』に発表してからわずか18年後に、この作品がドイツ語圏に紹介されたことになる。当時としては、異例の早さでの日本文学紹介であったと言えるであろう。

2. 新たな資料『日独国交断絶秘史』（1934年）

ところでこの2つの資料には、いずれも彼の生没年が記されていない。しかしその後調べていく内に、今一つ、宇佐美濃守の職業とおよその没年を示す資料が見つかった。それが『日独国交断絶秘史』（船越光之丞述・関野直次編 1934）であった。駐独臨時代理大使であった船越光之丞は、第一次世界大戦終了後16年経った1934年（昭和9）に、同大戦勃発時のベルリン大使館の緊迫した状況を口述した。この本は、それを関野直次が筆記し、史料をいくつか加えて編集したものである。歴史の表面に出なかった様々なエピソードを伝えており、興味深い資料である。

第一次世界大戦は、1914年（大正3）7月28日オーストリアのセルビアに対する宣戦布告で始まり、1918年11月11日のドイツ降伏によって終了した。世界25か国を巻き込んだ4年4ヶ月近くにわたる戦いであった。大戦開始後まもなく、8月23日には日独の国交が断絶し、日本はドイツに宣戦布告した。その結果ドイツ在住の日本人は、国外に退去せざるを得ない状態におかれた。

船越代理大使一行は、翌8月24日にベルリンを引き揚げ、50日あまりをかけて帰国している。そのルートはハーグ（8月24日着）からロンドン（8月28日着）、ストックホルム（9月14日着）、ペトログラード（サンクト・ペテルブルグ、9月24日着）、シベリア鉄道でハルビン（10月13日着）、さらに京城（ソウル）、釜山、下関（10月16日着）、東京（10月17日着）という長旅であった（船越光之丞述・関野直次編 1934：170-197, 214-215）。

3. 宇佐美濃守：オランダのハーグでの写真

実は、宇佐美濃守はこの一行の中にいたのである。身分はハンブルク総領事館員名誉領事館嘱託となっている。ただし就職・離任の時期は書かれていない（船越光之丞述・関野直次編 1934：216）。事の顛末は以下のような次第であった。つまり帰国直前の8月22日に、奥田ハンブルク総領事一行もベルリンに合流し（船越光之丞述・関野直次編 1934：160）、船越代理大使一行と一緒に帰国した。そのハンブルク総領事一行の中に宇佐美濃守がいた、ということである。

次の頁の写真1は、一行が列車で、ベルリンからまずオランダのハーグまで行った時に撮影したものである。写真の下には「大正三年八月独逸引揚の際蘭国首都に於ける一行の記念写真（前列中央船越男（爵））」と説明が付けられている（「爵」は筆者付加）。この時の一行の人数は全部で20名であり、その名前・肩書きは、宇佐美濃守も含めて明記されている（船越光之丞述・関野直次編 1934：171, 174-175）。

そしてこの中に宇佐美濃守も写っているように思われるので、それを確定するために、一行20名の内訳を



写真1 ハーグでのドイツ代理大使一行 『日独国交断絶秘史』口絵写真p. 2より

もう少し詳しく分析してみると次のようになる。男女の内訳は、男性14人、女性6人である。この内男性の内訳は文官10人、武官3人、従者(下男)1人である。女性の内訳は、文官・武官の妻・娘などが4人で、残る2人は従者(下女)と記されている。そしてこの写真には男性が13人、女性が3人の合計16人が写っている。従者の男女3人は入っていないと考えると、この男性13人は、文官と武官の全員であろう。そして女性の3人は、文官・武官の妻・娘などの内の3人であろう。つまり、この写真の男性13人の中に宇佐美濃守も写っていると考えられるのである。

既述のように、この時の宇佐美の身分は、ハンブルク総領事館員名誉領事館嘱託という仰々しいものであったが、要は正規の職員ではないということであろう。同書174-175頁の記述を見ると、この男性13人には代理大使、総領事、書記官、書記生、大佐、大尉などの職名がついているが、彼のみは「宇佐美君」となっている。おそらくこの中で年齢も一番若かったと思われる。このように絞っていくと、前から2列目の右から3人目、左手で帽子を持って立っている人物、おそらくこれが宇佐美濃守であろう。

4. 宇佐美濃守：在独期間及び没記事

既述のようにハルトマン名簿によれば、宇佐美はこの1914年からベルリン東洋語学校講師になったと記されている。おそらく夏学期の途中まで勤めて帰国した

ということであろう。当時のベルリン東洋語学校講師は辻高衡であった。彼は1902(明治35)から1916(大正5)までの約14年間、この職に就いていた。当初は日本人講師は1人であったが、その後日本語科の拡充が行われ、日本人講師が2人になった。そこで市川代治(在任1906-1908)、菅野養助(同1908-1910)などが就任した(上村直己 2001: 344-345)。宇佐美濃守もその一人であったことがわかる。なお市川代治については3年前に紹介した(泉健 2004a: 52-53)。

宇佐美がいつから、このハンブルクの名誉領事館嘱託の仕事始めたのかは不明である。ベルリン大学最後の冬学期が終わってからか(1912年春～)、あるいはその少し前の1910年乃至1911年頃より勤務に就いたとすれば、領事館に2～3年勤務する内に、ベルリン東洋語学校講師の就職口が決まったということになる。『舞姫』の独訳(1908～1909)が注目されて、このような道が開けていったのかもしれない。いずれにせよ以上の資料によって、宇佐美は1905年(明治38)から1914年(大正3)まで、通算9年間ドイツに住んでいたことがわかる。

ところでこの『日独国交断絶秘史』には、宇佐美濃守に関してもう一つ重要なデータが記されている。それはこの本が出版された時点で、宇佐美はすでに死去していたということである。この本は1934年(昭和9)4月13日に発行されている。これは、第一次世界大戦開始とともにベルリン大使館などの一行が帰国してか

ら、ちょうど20年後にあたっている。そしてこの本の中に、帰国時の一行の肩書きと、20年後のそれを比較した箇所がある。そこには、宇佐美濃守が死亡したことが記されているのである。残念ながら死亡時期については記載がない（船越光之丞述・関野直次編 1934：216）。帰国後の彼の消息、もう一度ドイツに行ったのか、あるいは日本で就職したのかについても、今のところ不明である。

いずれにせよ、『日独国交断絶秘史』の記述により、宇佐美濃守は1934年（昭和9）春頃にはすでに死亡していたことがわかる。著作権の有効期間は作者・訳者の没後50年なので、この『舞姫』の独語訳に関する宇佐美濃守の著作権はすでに期限切れである。従って彼の独語訳は、今日では公共の著作物として取り扱うことが可能となっている。

5. 宇佐美濃守に関する人名事典などの情報皆無

宇佐美濃守に関しては、日本の留学生関係の詳しい事典や著作を調べてみたが、どれにも載っていなかった。すなわち、『近代日本留学生史』（渡辺實 1977-78）、『新訂増補 海を越えた日本人名事典』（富田仁 2005）、『幕末・明治期 海外渡航者人物情報事典』（手塚晃・石島利男編 2003）、『近代日本の海外留学生史』（石附実 1992）などである。

また一般の人名辞典に関しても、時代的に宇佐美濃守の生存時期に最も関係が深そうなものを調査してみた。『大日本人名辞書』（田口卯吉編 1886）、『新撰大日本人名辞典』（平凡社 1937）、『大正過去帳 物故人名辞典』（稲村徹元他編 1973）、『大正人名辞典』（五十嵐栄吉編著 1918）などである（他の人名事典の詳細は、泉健 2004a：44-45参照）。しかしこれらにも彼の情報は皆無であった。

さらにドイツと日本の文化交流を扱った次のような文献にも、宇佐美の名前は出てこない。すなわち、“Die Deutsch-Japanischen Gesellschaften 1888-1996.”（Haasch, Günther.hrsgr. 1996）、“Berlin-Tôkyô : im 19. und 20. Jahrhundert”（Brenn, Wolfgang. Goerke, Marie-Luise hrsgr. 1997）、“Brückenbauer”（Hoppner, Inge. Fujiko, Sekikawa. 2005）、『東京—ベルリン/ベルリン—東京展』（森美術館編 2006）、『言語都市・ベルリン 1861-1945』（和田博文他 2006）などである。

『明治期ドイツ語学者の研究』には、東京帝国大学独文科の1891年（明治24）から1914年（大正3）までの卒業生名簿が掲載されているが（上村直己 2001：440-441）、この中にも宇佐美濃守の名前は載っていない。1902年（明治35）に宇佐美全賢という人物が卒業しており、時期的にはこれが一番可能性がある。つまり1902年に東大を卒業し、1905年から1911年までベルリン大学に留学したと言う具合につながっていく。「全賢」と

いう名前が雅号であれば、その可能性が大きい。しかしこの宇佐美全賢に関しては、今回の論文執筆までには調査が出来なかった。

6. 小池堅治独訳『舞姫』

さて宇佐美濃守の独訳の9年後、1917年（大正6）にもう一つの独訳が日本で出版されている。それが『独文 舞姫 倫敦塔』（森鷗外・小池堅治訳 1917）である。訳者の小池堅治は、仙台の旧制第二高等学校のドイツ語教授をしていた人物である。この訳はさらに13年後の1930年（昭和5）に、『独和対照鷗外小品』（森鷗外・小池堅治訳 1930）にも収められている。前者については筆者は未見であるが、後者はB6版全218頁の書籍である。

小池堅治は1878年（明治11）に生まれ、1969年（昭和44）に亡くなっている。東京帝国大学独文科を1903年（明治36）に卒業し（上村直己 2001：440）、1921年（大正10）には、斎藤茂吉と同じ船でドイツに留学した（斎藤茂吉 1953：402）。『獨逸留学生通信』（丸善、1924）という著作も残している。専門に研究していたのはドイツ表現主義の文学であったようで、『表現主義文学の研究』（小池堅治 1926）という著書がある。これは2003年に、ゆまに書房から「海外新興芸術論叢書シリーズ」の1冊として復刻されている。このシリーズは、主に大正時代に現れ昭和前期のモダニズムの源流となった著作などを復刻したものである。

東北大学資料館の東北大学関係写真データベースには（<http://www2.library.tohoku.ac.jp/tuaphoto/index.php>）、小池堅治の写真が14枚掲載されている。このように、大学・研究所等に籍を置いていた人物は、今日でもかなり詳しくその足跡を追跡することができる。しかし宇佐美濃守のように、帰国後の所属が不明の人物の場合にはそれが難しい。

III. 宇佐美濃守と老川茂信の接点

1. “Ost=Asien”から“Japan und China”へ

1) 接点その1. “Ost=Asien”時代

老川茂信については、調査の結果わかったことを、これまで少しずつ拙稿の中で紹介してきた（泉健 2005a：32-34, 43-44、泉健 2006：39-40、泉健 2007：28-29, 37）。今回も宇佐美濃守との関連で新たな発見があったので、それをここに記しておきたい。

さて宇佐美濃守訳の『舞姫』は、“Ost=Asien”の通巻115～129号、1908年（明治41）～1909年（明治42）にかけて連載された。この雑誌は玉井喜作が1898年（明治31）4月に創刊し、1910年（明治43）2月まで、全139号が発行された。玉井は1906年9月に亡くなっているで、彼が編集長を務めたのは通巻101号までであった。その後2ヶ月の休刊をはさみ、老川茂信がその後を継

いで、通巻102号から最後の139号までを発行した。従って、『舞姫』が連載されたときの編集長は老川茂信であった。ここに宇佐美濃守と老川茂信の接点の一つがある。しかし調査を進めていく内に、両者にはもう一つ接点があることがわかった。それは“Ost=Asien”の廃刊後の話である。

2) 接点その2. “Japan und China”時代

そこで次に、“Ost=Asien”の後継誌である“Japan und China”のことを紹介しておきたい。下の表1は、現在までに分かっている限りでの、この雑誌の発刊状況を示すものである。1910年(明治43)の1月号と2月号(通巻138号と139号)は“Ost=Asien”であり、この雑誌はこの2月号で廃刊になっている。老川茂信はその後2ヶ月間の準備期間を置き、同年5月から、誌名を一新して“Japan und China 日清月報”とし、新たに月刊誌として再出発した。さらに1912年1月1日には清朝に変わって中華民国が成立したので、同年8月号以降は、誌名を“Japan und China 日華月報”と変更している。

この雑誌は、国立国会図書館ではなく、日本の大学では岩手大学に通巻9号から40号までが揃っている。他には東京大学に通巻1, 17-22, 24号があるのみである。従って、通巻2-8号は日本の大学には存在しないし、41号以降が刊行されたかどうか不明である。もし41号が発行されていたとすれば、それは1914年(大正3)の1月号になる。

日本ではこの1月にシーメンス事件が起こり、そのため3月24日には山本権兵衛内閣が総辞職に迫られている。さらに第一次世界大戦はこの年の7月28日に始まっており、同年8月23日には日本はドイツに対して宣戦布告をした。従って、それ以降日本人がベルリンでドイツ語の月刊雑誌を出版するのは不可能である。このような状況を考慮すれば、41号以降が刊行されたにしても、1914年の初め頃までではないかと思われる。

それはさておき、宇佐美濃守と老川茂信の接点の2

つ目は、この雑誌“Japan und China”の編集事務所の住所に関することである。すなわち同誌の通巻1号～10号の住所はSW.11, Berlin, Kleinbeerenstrasse 9であり、これは“Ost=Asien”の3度目の編集事務所と同じである(泉健 2005a: 36)。ところが、通巻11号～40号の住所はBerlin-Schöneberg, Königsweg 14と変わっている。実は既述のように、これは宇佐美濃守の新しい住所と同じなのである(本稿p.29参照)。

通巻11号は1911年(明治44)3月号にあたる。そして宇佐美濃守の新しい住所の載った独和会の会報は1910年12月号であった。ということは、宇佐美濃守が引越してしばらくしてから、その同じ住所に“Japan und China”の編集事務所も引越したことになる。

3) 玉井喜作→老川茂信→宇佐美濃守

これはおそらく次のような事情なのであろう。つまり玉井喜作と老川茂信と宇佐美濃守が、“Ost=Asien”と後継誌“Japan und China”をめぐって、順次協力しあっていったということである。

すなわちまず、玉井喜作が1898年(明治31)に“Ost=Asien”を独力で創刊した。老川茂信は、シベリア鉄道経由で1903年(明治36)5月21日にベルリンに着き、やがてベルリン大学の学生となる(老川正行 1899-1924)。そしていつの頃からか、“Ost=Asien”の編集・出版を手伝うようになった。しかし1906年(明治39)9月25日に、創刊者玉井喜作が亡くなった。そこで老川はそれを受け継ぎ、同年11月号から“Ost=Asien”の刊行を続けていった。

一方宇佐美濃守は、1905年夏学期からベルリン大学でドイツ語を学び始めている。宇佐美の初めの住所は、“Ost=Asien”の編集事務所から歩いて10分もかからない所であった。そして宇佐美は1908年(明治41)1月号から“Ost=Asien”に『舞姫』の独訳を連載し始める。おそらくこの前後から、宇佐美は老川を手伝って、“Ost=Asien”の編集出版にかかわっていたのではないだろうか。

そして老川は1910年(明治43)2月号で“Ost=

表1 月刊誌“Japan und China”通巻号表(上段: 巻-号表示 下段: 通巻号数表示)

西暦	和暦	巻	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1910	明治43	1	12-6 138	12-7 139			1-1 1	1-2 2	1-3 3	1-4 4	1-5 5	1-6 6	1-7 7	1-8 8
1911	明治44	1/2	1-9 9	1-10 10	1-11 11	1-12 12	2-1 13	2-2 14	2-3 15	2-4 16	2-5 17	2-6 18(合併号)		2-7 19
1912	明治45 大正1	2/3	2-8 20	2-9 21	2-10 22	2-11 23	2-12 24	3-1 25	3-2 26	3-3 27	3-4 28	3-5 29	3-6 30(合併号)	
1913	大正2	3/4	3-7 31	3-8 32	3-9 33	3-10 34	3-11 35	3-12 36	4-1 37	4-2 38	4-3 39(合併号)		4-4 40(合併号)	
1914	大正3	4?	?											

Asien”を廃刊にした後、同年5月号からは新しい雑誌“Japan und China”を発行し始める。そこで気分一新、新しい編集事務所を探すことになった時に、老川と宇佐美の両者は相談し、宇佐美も一緒に住めるような広さのものを借りたのであろう。そして引っ越しは宇佐美の方が数ヶ月前に行った、ということではないかと思われるのである。あるいは、宇佐美が引っ越した新しい住所Berlin-Schöneberg, Königsweg 14が広かったのも、老川が宇佐美に相談して、“Japan und China”の編集事務所もそちらに引っ越したということであったのかもしれない。それまでは二人ともアンハルター駅の近くに住んでいたが、新しい住所であるSchöneberg地区は、同駅からもう少し南に下った所である。それまでの老川・宇佐美の住所からそれほど離れてはいない。

2. 老川茂信：密使としてハンブルクへ

ところで、1914年以降の“Japan und China”の発刊状況は不明なのであるが、この年の老川茂信の行動はいくつかわかっている。その一つに、同年8月18日から19日にかけて、老川がベルリン大使の密使としてハンブルクに行ったことが挙げられる。これは、彼が第一次世界大戦の折に、ドイツ在住の日本人の帰国に貢献したという話である。同年8月23日の国交断絶直前の話であるが、既述の『日独国交断絶秘史』には、その間の経緯が詳細に描かれている。

それによれば、この密使の使命は、国交断絶時のハンブルク総領事館の引き揚げなどに関する指示を伝えるためのものであった。もちろん、船越代理大使はこの件を伝えるために、すでにハンブルクへ電報を打っていた。しかし、この時期には郵便電信も不確実となっており、確実を期すために、老川茂信が依頼されてハンブルクまで行ったのであった。

ベルリンとハンブルクの間は、当時でも通常は列車で3時間ほどの距離であった。しかし、この時期にはすでに交通機関が軍部の支配下にあったため、軍事用列車が優先されたので、普通客は13～14時間かけてハンブルクまで行かねばならなかった。老川は8月18日に出発し、無事任務を済ませて8月19日にベルリンに戻ってきた。

しかし翌20日には、ドイツ政府が日本側の最後通牒を公表したため、ベルリンの新聞各紙はこぞって日本批判を開始した。そこでドイツの官憲は、この日から保護の名のもとに日本人全部を拘禁した(船越光之丞述・関野直次編 1934：71-73)。第一次世界大戦開始当時ベルリンにいた日本人は、約500名であったが、8月20日まではかなりのものが国外に退避し、20日に拘禁された日本人は約100名であった(船越光之丞述・関野直次編 1934：79, 98)。そして老川茂信も、20日の朝、他の日本人と同じようにドイツ側に拘禁された



写真2 老川茂信『日独国交断絶秘史』p.115より

のであった(船越光之丞述・関野直次編 1934：114-116)。

そして既述のように、その2日後、8月22日にベルリンに合流した奥田ハンブルク総領事一行は、翌23日朝、ベルリン大使館一行とともに、ベルリンを去りオランダに向かった。宇佐美濃守もこの時一緒に帰国した。しかし老川茂信とベルリン東洋語学校講師の辻高衡は、その後もベルリンに残っている。船越代理大使は老川茂信に帰国を強く促したが、「如何なる危険があっても、断然ドイツに止まる決心なり、とて容易に余の勧告を用いず、依然ふみ止まっていたのである」(船越光之丞述・関野直次編 1934：115)。船越代理大使が老川茂信と辻高衡の無事を知ったのは、帰国途中のシベリア鉄道の中であった(船越光之丞述・関野直次編 1934：194)。老川茂信が日本に帰国したのは、それから12年後の1926年の暮れであった(泉健 2005a：34)。

上の写真2は『日独国交断絶秘史』115頁に掲載された老川茂信であり、写真の下には「ハンブルク総領事館に派遣されたる老川茂信氏」という説明が付けられている。老川は1883年生まれなので、この派遣された1914年には31歳であった。ここに掲載された写真は、この本が出版された1934年、つまりそれから20年あまりを経た50歳前後のものと思われる。

IV. 老川茂信と斎藤茂吉の出会い

1. 第一次世界大戦前後のベルリンを知るために

このように『日独国交断絶秘史』は、第一次世界大戦開始前後の、ベルリン大使館を中心とした日本人社会の緊迫した日々をつぶさに伝えている。一方、ドイツ側から見た第一次世界大戦の間のベルリンの状況に

については、『ベルリン・嵐の日々 1914-1918』(グラツァー, D., グラツァー, R., 1986)がその具体的な様相を詳細に伝えている。また戦前からナチス政権成立直前までの約20年間、ベルリンで花開いた様々な芸術運動に関しては、『ベルリン 芸術と社会 1910-1933』(ロータース, E. 編 1995)に詳しい。さらに平井正教授の3冊のベルリン史に関する本は(平井正 1981, 1982, 1985)、1918年から1933年までのベルリンの歴史を多面的な角度から見事に浮き彫りにしている。

ついでながら、19世紀末から20世紀初めのベルリンの写真集も、この時代を知る上で貴重な資料である。“Alt-Berliner Photoalbum.”(Landesbildstelle Berlin 1998)は、19世紀末から1920年代頃の写真を中心に、ベルリンの街や様々な階層の人々の生活の様子を伝えている。また、“Das alte Berlin: Photographien 1890-1910.”(Zille, Heinrich 2004)に掲載されている写真の撮影された時代は、玉井喜作がベルリンで過ごした約12年半あまり(1894-1906)とほぼ重なっている。こちらでは、主としてベルリンの庶民の生活が取りあげられており、玉井が過ごした当時のベルリンの生活の様子がよくわかる。

2. 斎藤茂吉「盗難記」とハンブルクの老川茂信

1) 第一次世界大戦中と大戦後の老川茂信

さて、老川茂信の第一次世界大戦中及びそれ以後の動向に関しては、これまで不明であった。しかし昨秋、老川茂信を大伯父とする老川伸氏(泉健 2007: 37参照)から入手した新資料『老川家元祖ヨリ累代記録』(老川正行 1899-1924)には、そのことが記載してあった。これは、長男茂信のヨーロッパからの手紙に基づいて父親の正行が記したものであり、資料的価値が非常に高い。

それによれば、老川は戦争開始の翌々年、1916年(大正5)1月28日にベルリンを出てスイスのチューリヒに移っている。それまで、戦争開始から約1年半近く、彼がベルリンでどのように過ごしていたのかは記されていない。チューリヒでは年俸3600円で領事館に勤め、そこに第一次世界大戦終了後の1919年(大正8)7月26日まで勤務している。その後戦後のドイツに再び戻り、同年7月末からハンブルクのオウベルベック街11番地に居住した。勤務先は、久原財閥系列の久原商事(株)ハンブルク支店、年俸は6000円であった。因みに1919年には、日本の大学卒の銀行員の初任給は、年俸で480円~600円であった(週刊朝日編 1982: 69)。なお老川茂信の親戚にあたる金沢大学名誉教授の岡田晃氏も、この『老川家元祖ヨリ累代記録』に基づいて、当時の老川茂信のことを紹介しておられる(岡田晃 2005: 16)。

2) 斎藤茂吉「盗難記」

ところで、この頃の老川茂信の足跡を伝えるもう一

つの資料がある。それは歌人斎藤茂吉の『滞欧随筆』に収められている「盗難記」である。ここには、斎藤茂吉がヨーロッパ留学中(1921-1924)に、ハンブルクーベルリン間の車中で拘摸にあった話が描かれている。その中に、当時40歳を目前にした老川茂信が登場する。時期は老川茂信がハンブルクに移ってから1年5か月後の、1921年(大正10)暮れから1922年初めであった。

斎藤はベルリンに着いて間もなく、日本円で作成したトラベラーズ・チェックの一部をポンドのそれに変えるために、ハンブルクの横浜正金銀行支店に行く用事ができた。ハンブルクには義父斎藤紀一の代から親交のあった老川茂信が住んでいたのも、ついでに彼の自宅に寄り歓待を受ける。しかし翌日ベルリンに帰る列車の中で、大事なトラベラーズ・チェックを盗まれてしまった、というのがこの「盗難記」の内容である。幸い、そのトラベラーズ・チェックはしばらくして見つかるのだが、この短編には、いくつかの興味深い情報が含まれている。

冒頭に、「老川氏は父紀一が留学中、それから二度目の滞欧中にも、いろいろ世話にもなり、親交があったので、私のことについて万事頼むという意味の書簡をよこして置いて呉れた」(斎藤茂吉 1953: 395)という下りがある。茂吉の義父斎藤紀一は、1899-1903年にドイツに留学した。そして1901年(明治34)夏学期から1902年夏学期まではベルリン大学に在籍(医学専攻)し、医学博士の学位を取得している(泉健 2004a: 62-63)。その時の彼の住所はハレッシュェ通りで、玉井喜作のすぐそばに住んでいたことがわかる(泉健 2005a: 37)。『老川家元祖ヨリ累代記録』(老川正行 1899-1924)の老川茂信の項を読むと、老川茂信は、既述のようにシベリア鉄道経由で1903年(明治36)5月21日にベルリンに着いている。従って斎藤紀一の最初のベルリン滞在中には、老川茂信はまだ日本にいたことがわかる。

斎藤紀一は、1908年(明治41)-1910年に再び渡欧し、欧州各地の病院を訪れている。“Ost=Asien”の編集長は、すでに老川茂信に代わっていた時代である。その時には同誌の通巻134号(1909年9月号)に、「日本とアメリカの精神病について」という論文を寄稿している。このような関係があったので、斎藤紀一は息子の茂吉がヨーロッパに留学する時にも、老川茂信によりしく頼むと一筆書いておいた、というのが上記の一節の意味するところである。斎藤茂吉が招待された日の夕食の様子を描いた次の文章は、当時の老川茂信夫妻の生活の様子を伝えている。

「老川氏は私のために、横浜正金銀行支店長の平野氏、ハンブルク総領事大野守衛氏、それからお友達の永野氏をも請待せられて、間もなく晩餐になった。夫人も一緒に大きな食卓であった。夫人は独逸語で女中と話しておられたが……私は老川氏の今夜の心づくし

に対して深く感謝して夜遅く辞したが、老川氏は Palast Hotel を世話せられ、私を自動車でホテルまで送届けるように永野氏に頼まれたのであった」（斎藤茂吉 1953：396）。

またこの「盗難記」の最後のあたりに、「同船で来た小池堅治君」（斎藤茂吉 1953：402）と記されているのが、宇佐美濃守の9年後に『舞姫』を独訳した小池堅治である。小池は1878年（明治11）生まれなので、43歳の時（1921年）にドイツに留学したことがわかる。彼の『獨逸留学生通信』（丸善、1924）は、従ってその留学の折のことを書いたものである。

V. 宇佐美濃守訳『舞姫』

それでは次に宇佐美濃守訳の『舞姫』を紹介していきたい。これは“Ost=Asien”の通巻115号1908年（明治41）1月号から、通巻129号1909年（明治42）4月号までに、全12回に分けて連載された。各号のデータは次のようになる。No. 9 が掲載された通巻126号は、1908年12月号と1909年1月号の合併号である。

- Nr. 1 ; Ost=Asien, Nr.115, Jg.10-7, 1908, Jan.
- Nr. 2 ; Ost=Asien, Nr.116, Jg.10-8, 1908, Feb.
- Nr. 3 ; Ost=Asien, Nr.117, Jg.10-9, 1908, März
- Nr. 4 ; Ost=Asien, Nr.118, Jg.10-10, 1908, Apr.
- Nr. 5 ; Ost=Asien, Nr.119, Jg.10-11, 1908, Mai
- Nr. 6 ; Ost=Asien, Nr.120, Jg.10-12, 1908, Juni
- Nr. 7 ; Ost=Asien, Nr.121, Jg.11-1, 1908, Juli
- Nr. 8 ; Ost=Asien, Nr.124, Jg.11-4, 1908, Okt.
- Nr. 9 ; Ost=Asien, Nr.126, Jg.11-6, 1908, Dez. & 1909, Jan.
- Nr. 10 ; Ost=Asien, Nr.127, Jg.11-7, 1909, Feb.
- Nr. 11 ; Ost=Asien, Nr.128, Jg.11-8, 1909, März
- Nr. 12 ; Ost=Asien, Nr.129, Jg.11-9, 1909, Apr.

【凡例】

- 1) 日本語版の底本。
比較の際の日本語版は、『新日本古典文学大系明治編25森鷗外集』（森鷗外・小泉浩一郎他校注 2004）を底本とした。
- 2) 改行について。
日本語版と宇佐美濃守訳の改行が一致する所は、1行空けて改行してある。1行空けてなく改行のみの所は、宇佐美濃守訳の改行であり、日本語版にはその部分の改行はない。逆に、宇佐美濃守訳の文章の途中についている△の印は、その部分で日本語版は改行されていることを意味する。
- 3) nil admirariについて。
宇佐美濃守訳の第1回目（通巻Nr.115）にでてくる nil admirari を、宇佐美は vir admirable と書き換えている。これはおそらくこの時点では、nil admirari が「ローマの詩人ホラティウス（前65-前8）の書簡集（Epistulae）第1巻第6書簡（ヌミーチウス宛）冒頭部分の句」で、「無感動なこと。冷淡で傍観的な处世態度を言う」（森鷗外・小泉浩一郎他校注

2004：3）ということが理解できていなかったためと思われる。この部分の宇佐美訳は nil admirari に直した。

- 4) 太田豊太郎、相沢謙吉、天方伯爵の姓の表記。
太田については1回はOta、1回はOdaと記されている。ここではOtaに統一した。相沢については、1回のみAizawaとなっており、他はAisawaと記されている。ここではAizawaに統一した。天方については、1回のみAmekata、他はAmakataと記されている。天方伯爵のモデルとされている山県有朋の姓の表記Yamagataを考慮すれば、Amagataの読みもありうるが、これはAmakataに統一した。
- 5) 引用符の《》は、“ ”に統一した。
- 6) 明らかな綴り字の間違いは訂正した。

Die Tänzerin

Japanischer Roman von Professor Mori.

Ins Deutsche übersetzt von Nomori Usami.

Nr.1 ; Ost=Asien, Nr.115, Jg.10-7, 1908, Jan.

Schon sind die Steinkohlen zu Haufen geschichtet, die elektrischen Glühkörper der Beleuchtung sind noch nicht eingeschaltet. An dem Tisch in der II. Kajüte ist es sehr still. Die Gesellschaft der Kartenspieler, welche sich sonst jeden Abend hier versammelt, fehlt. Alle andern übernachten im Hotel am Lande, nur ich allein bin an Bord zurückgeblieben.

Vor fünf Jahren ist es gewesen ; meine alltägliche Hoffnung hatte sich erfüllt. So unternahm ich auf staatlichen Befehl hin die Reise ins Ausland. Als ich zu jener Zeit im Hafen Saigon landete, kam ich aus dem Staunen nicht heraus. Alles was ich dort sah und hörte war mir bis jetzt unbekannt gewesen. Es gab nichts, was nichts Neues für mich gewesen wäre. Täglich vertraute ich meine Eindrücke meinem Pinsel an, und Tag für Tag wuchs meine Raisebeschreibung um mehrere tausend Wörter. Der Bericht wurde von der Zeitung angenommen und veröffentlicht, von den Lesern wurde er sehr gelobt. Wenn ich jedoch jetzt darüber nachdenke, an meine jugendlichen Eindrücke von damals, meine Prahlereien aufs Geratewohl, wie ich gewöhnliche Tiere, Pflanzen und Mineralien, sowie Sitten usw. als wunderlich und überaus seltsam beschrieben habe, so möchte ich wissen, was sich weltkundige, erfahrene Leute beim Lesen gedacht haben.

Auch dieses Mal als ich meine Rückreise antrat, kaufte ich mir ein Buch, um wiederum

die Erlebnisse während meiner Reise niederzuschreiben. Doch—bis jetzt ist in dem Buche noch ganz weisses Papier.—Vielleicht, dass sich während der Zeit meines Studiums in Deutschland ein nil admirari Charakter bilden konnte! Doch ist es nicht dieser, sondern ein anderer Grund. △ Dieser Mensch, als welcher ich nach Osten zurückkehre, ist wirklich nicht mein früheres Ich, wie es nach Westen kam.

In der Welt gibt es sehr vieles, doch nur noch von der Wissenschaft bin ich ungesättigt geblieben. Die ganze Jämmerlichkeit der irdischen Welt habe ich kennen gelernt. Ich verstehe jetzt das Misstrauen der Menschenseele. Wie leicht kann ich selbst mich und meine Seele verändern. Mein Empfinden verändert sich jeden Augenblick, so dass gestriges Recht heutiges Unrecht wird.

Vertraue ich schreibend alles meinem Pinsel an wem kann ich es zeigen!?

Ist es dieser Zustand, dass mein Buch unbeschrieben bleibt? Nein, es ist nicht dieser, sondern ein anderer Grund.—

Ach, seit ich den Hafen Brindisi verlassen habe, sind schon über 20 Tage vergangen. Es ist gebräuchlich, dass man mit dem ersten besten Passagier einen Verkehr anknüpft, um sich gegenseitig während der langen Fahrt die Langeweile zu vertreiben. Das ist so die Gewohnheit beim Reisen. Ich jedoch sitze immer in der Kabine allein; meines eigentümlichen Verhaltens wegen habe ich Unwohlsein vorgeschützt, denn wenig nur unterhalte ich mich mit meinen mitreisenden Landsleuten.—

Nur ein unaussprechlicher Kummer füllt mir den Kopf, dieser Groll, dieser Hass umhüllte mein Herz am Anfang wie eine dunkle Wolke, er liess mich nicht die Ansichten in der Schweiz bewundern. Er quälte mein Herz, dass ich nicht Ruhe fand bei den Ruinen Italiens zu verweilen. Erst später empfand ich meine jetzige Abgeschlossenheit von der Welt, und wie unsagbar traurig mein Leben nun ist.

Nr.2 ; Ost=Asien, Nr.116, Jg.10-8, 1908, Feb.

Dieses Gefühl erstarrte nun tief im Sinn und nur eine Bewölkung blieb. Jedoch unverändert, immer wieder, bei jedem was ich lese oder sehe, erinnert mich eine leidenschaftliche Seh-

sucht an das Vergangene. Gleich wie mein Schatten im Spiegel sich wiederholt oder wie ein Wiederklang meiner Stimme und noch oftmals bekümmert sich meine Seele. Ach! auf welche Weise soll ich dieses auslöschen.—Anderes Leid fasste ich in ein Gedicht oder Lied, dann würden meine Gedanken klar werden und sich beruhigen. Aber dieses liegt zu tief in meinem Sinn vergraben; —so glaube ich! Heute Abend ist kein Mensch in meiner Nähe, noch viel Zeit bleibt übrig, bis der Stewardt hereinkommt, um auf den elektrischen Knopf zu drücken. So werde ich versuchen, alles in einfachen Sätzen zusammen zu fügen.

Meine Jugend verlebte ich glücklich in strenger Hauszucht. Obwohl ich meinen Vater früh verlor, vernachlässigte ich meine Wissenschaft nicht in jugendlichem Ungestüm. In der Zeit, wo ich in der Daimiat-Studierstube lernte, dann nach Tokyo kam und in die Hochschule ging, später in die juristische Fakultät der Universität eintrat, immer stand mein Name Ota Toyotaro als erster an der Spitze der Klasse. Die Seele meiner Mutter wurde dadurch getröstet, da sie auf mich, ihren einzigen Sohn, als ihrer Macht vertraute und lebte.—

Im 19. Jahre erhielt ich den Dokortitel. Es wurde öffentlich bekannt gegeben und ich den Leuten als einzigartig hingestellt. Seit der Gründung der Universität hatte sich dieser Fall bis jetzt nicht ereignet.

Ich bekleidete nun eine Stellung in einem Ministerium und empfahl meiner Mutter aus der Heimat hierher in die Hauptstadt zu kommen. So verbrachte ich fast drei vergnügte Jahre. Da ich das Vertrauen des Bureaudirektors im höchsten Masse genoss, so erhielt ich den Auftrag, im Auslande mich mit dem Studium eines bestimmten Faches zu beschäftigen. Ich stand freudig erregt da, nur jetzt könne die Gelegenheit sich bieten, dass ich einen grossen Ruf bekommen würde, um meiner Familie eine gute Zukunft zu sichern. Darum war ich nicht besonders traurig, als ich von meiner über fünfzigjährigen Mutter Abschied nahm und mein Haus verliess. So kam ich in die Hauptstadt Berlin, △ stand plötzlich inmitten der neuen grossen Hauptstadt mit den verschleierte Ideen eines ungeheuren Ehrgeizes und Fleisses, welcher mir

schon durch Zwang zur Gewohnheit geworden war.

Welche Grenze traf die Iris meines Auges?—Welche Erscheinung ist es gewesen, die mein Herz diesen Irrtum begehen liess?—

Wenn man die Worte—Unter den Linden—hört, so glaubt man, dass es eine abgelegene, einsame Eremitage sei!—Aber kommt nach hier, Unter den Linden, seht die gruppenweise promenierenden Damen, auf beiden Seiten Trottoir aus Stein. An der Strasse, oben am Eckfenster, sitzt aufgestützt Kaiser Wilhelm I. Stolze Offiziere in schmucken Uniformen verschiedener Farben, mit breiter Brust und geraden Schultern. Ein schönes Mädchen nach Pariser Mode gekleidet. Doch dieses noch jenes ist es, das meine Sinne verwirren liess!—

Verschiedene Wagen gleiten auf dem Asphalt des Fahrweges geräuschlos vorüber. Wo die Reihen der bald bis zu den Wolken strebenden Gebäude unterbrochen sind, dort steigt eine Fontäne zu dem hellen Himmel empor, mit dem Rauschen des Gewitters, zerstäubend fällt das Wasser zurück. Die Viktoriafigur auf der Siegessäule, fast halb in den Himmel schwebend, sieht man hinter dem Brandenburger Tor von den gekreuzten grünen Bäumen sich abheben von weitem. Wer zum ersten Mal hierher kommt, kann wirklich nicht auf einmal diese verschiedenen Anblicke in sich aufnehmen.

Aber ich schwur in meiner Brust, auf jeden Fall meine Gedanken durch die bezaubernd schönen Aussichten verbotener Genüsse nicht bewegen zu lassen.—Gegen diese Versuchungen, welche mich bestürmten und abzulenken drohten, habe ich mich immer gewehrt.—

Bei allen preussischen Beamten, wo ich am Klingelzug läutete, meinen Besuch melden liess, den amtlichen Empfehlungsbrief abgab und meine Gründe weshalb ich aus Osten gekommen bin, mitteilte wurde ich sehr freundlich empfangen. Ich bat, mich zu belehren und herumzuführen. Ohne Hindernis entledigte ich mich der Anordnungen der Gesandtschaft. Es war eine Freude für mich, dass ich in der Heimat Deutsch und Französisch gelernt habe. Denn niemals ist es geschehen, dass man mich nicht zuerst gefragt hat, wo und wann ich diese Sprachen so gut erlernt hätte.

Nr.3 ; Ost=Asien, Nr.117, Jg.10-9, 1908, März

Meinen Namen liess ich in das Anmeldebuch eintragen, da ich an der hiesigen Universität Staatswissenschaft studieren wollte. Die Erlaubnis der Regierung hatte ich schon erhalten. Wenn mir nun neben meinem staatlichen Dienste Zeit bleibt, so will ich die Vorlesungen besuchen.

Als einige Monate vorbei waren, hatte ich bereits meine öffentlichen Studien beendet.

Die Aufzeichnungen meiner Untersuchungen sind nach und nach gewachsen. Wenn ein Bericht eilig ist, so schicke ich ihn ab, sonst behalte ich die Abschrift. Wieviel Bände wird es schliesslich zählen! In der Universität ist es nicht möglich das besondere Fach zu finden, um ein grosser Politiker zu werden, wie ich nach meinem jungen Herzen berechnet hatte. Ob ich mich gleich in meinem Herzen über dieses und jenes irrte, so stellte ich mir doch eine Reihe Vorlesungen von Professoren über Staatswissenschaft zusammen, bezahlte im Voraus das Honorar und ging sie zu hören.

Auf diese Weise vergingen ungefähr drei Jahre wie ein Traum.

Es kommt dann eine Zeit, die man nicht verheimlichen kann, wenn man sie auch zu verdecken sucht. Es ist ein menschliches Verlangen!

Von der Zeit ab, dass ich meines toten Vaters letzten Willen hüte, den Lehren meiner alten Mutter gehorche und sehr eifrig gelernt habe, da man mich als “Gottbegnadeten” lobte, fühlte ich mich sehr glücklich, bis zur nachlässig gedienten Zeit. Wie glücklich war ich, wenn mein Bureaudirektor mich ermutigte, dass er eine so gute grosse Hilfe gefunden habe. So konnte ich nur ein passiver, mechanischer Mensch sein, welcher selbst nichts wahrnimmt? Aber jetzt war ich 25 Jahre alt.—So lange habe ich diese freiwillige Schüler-Lebensweise und-Gewohnheit beibehalten.

Nun lässt sich im Innern meines Herzens irgend ein Unbestimmtes nicht beruhigen.

Unsagbar unruhig bin ich. Meine persönlichen Gedanken, welche sich bis jetzt tief im Hintergrunde versteckt hielten, erscheinen an der Oberfläche. Ebenso leicht ist zu begreifen, dass

ich mein gestriges Ich nicht mehr sein werde.—Ich meine, ein Politiker zu werden, welcher sich in dieser Welt hervorragend auszeichnen soll, ist nichts—auch Jurist werden, die Gesetze gut auswendig lernen und im Gericht zu urteilen—ist auch nichts. Solche Geständnisse durchschweben meine Gedanken. △ Selbst meine ich heimlich, dass meine Mutter aus mir ein lebendes Lexikon machen möchte, mein Bureaudirektor ein lebendes Aktenverzeichnis.—Ein Wörterbuch zu sein, kann ich noch erdulden, aber eine Aktenschrift zu werden, das kann ich nicht ertragen.

Ich disputierte in dieser Zeit brieflich mit meinem Bureaudirektor, damit einzelne Artikel über das Rechtswesen nicht bezogen werden sollen. Ich liess verlauten: “Wenn man nur einmal die Seele des Wesens verstanden habe, so würden alle andern wichtigen Artikel wie die Spannung von Bambus sein.” Trotzdem hatte ich bis jetzt selbst die einfachsten Aufgaben mit äusserster Achtsamkeit vorgenommen. Auch in der Universität habe ich mich den Vorlesungen der juristischen Fakultät entfremdet. Ich näherte mein Herz der Geschichte und Literatur. So betrete ich jetzt kaum die Grenze, hinter welcher für mich Interesse liegt. △ Der Chef möchte aus mir nur ein Werkzeug bauen, welches er nach seinem Willen benutzen kann.

Unmöglich wird er sich über einen Menschen freuen, welcher nicht mehr sein gewöhnliches Gesicht zeigt.

Meine damalige Stellung war in Gefahr. Aber doch würde dieser Grund allein nicht genügen, dass man mich von meinem Posten stürzen kann. Es kam während dieser Zeit zu einem spannenden Verhältnis zwischen mir und einer gewaltigen Partei von Studenten in Berlin.

Jene waren neidisch auf mich. Schliesslich wurden auch über mich verleumdende Reden geführt. Aber—gab es denn einen Grund dazu? —Doch!—

Weil ich mit ihnen zusammen das Bierglas nicht hebe und die Billardstange nicht führe! So glaubten jene Studierenden, dass ich mich nur von meinem harten Herz und kräftigen Willen beherrschen lasse und verspotteten mich. Ferner beneiden sie mich, aber nur, weil sie mich nicht verstehen. Ach, diesen Grund wusste ich selbst

noch nicht. Wie sollen ihn dann andere wissen!

Mein Herz ähnelt den Blättern des Impatiens nolitangere. Wenn es berührt wird, schrumpft es zusammen und will alles meiden.—Mein Herz ähnelt der Jungfrau.—

Wie ich von Jugend den Lehren der Erzieher gehorcht und auch die Wege der Wissenschaft tastend suchte, den Dienstweg einschlug, so habe ich nichts mit eigenem Mut getan, obwohl es wie eigene Kraft an Geduld und Fleiss erscheint. Aber das hiess sich selbst betrügen und die Leute sind auch betrogen. Ich verfolgte nur eine Wegspur tastend, die man mir zeigte. Dass ich mit andern Dingen mein Herz nicht zerstreute, kam nicht meines Mutes wegen.

Nr.4 ; Ost=Asien, Nr.118, Jg.10-10, 1908, Apr.

Dass ich alle äusserlichen Dinge unbeachtet liess, kam allein dadurch, weil ich mich vor diesen Ausserlichkeiten fürchtete. Darum hielt ich selbst die eigenen Hände und Füsse gefesselt.—Ehe ich meine Heimat verlassen hatte, bezweifelte ich nicht, ein vortrefflicher Mann zu werden. Ich glaubte, alles in meinem Herzen ruhig erdulden zu können.

Ach,—es geschah nur einen Augenblick!—Trotzdem ich mich für einen so bewundernswerten Mann hielt, habe ich doch, als das Schiff Yokohama verliess, meine Taschentücher mit unzurückdrängbaren Tränen benetzt.—Verwundert war ich darüber; aber, damals hatte sich doch nur mein natürlicher Charakter gezeigt.—Wie wurde dieses Herz geboren? Kam es, weil ich meinen Vater früh verloren und die Hände der Mutter mich aufgezogen haben? △ —Es ist recht, dass jene Leute mich verspotten. Aber es ist ungerecht, dass sie mich beneiden. Dieses schwache, arme Herz!—

Sehe ich eine Frau mit rot und weissgeschminktem Gesicht in eleganter, moderner Toilette im Kaffeehaus sitzen und die Aufmerksamkeit der Gäste auf sich ziehen, so verspüre ich keine Lust mich anzuschliessen.—Wenn ich dem Lebemann begegne, mit hohem Zylinder, den Klemmer auf der Nase, näselnd, wie es in den adligen Kreisen Preussens üblich ist, so habe ich auch keine Lust mit ihm zu gehen, um zu spielen. Für alles dieses habe ich kein Interesse.

So hat es auch keinen Zweck, mit meinen lustigen Landsleuten zu verkehren. Sie verspotteten mich immer, beneiden mich und zweifeln sogar an meinem zurückgezogenen Leben. Aus diesem Grunde hatte ich auch eine Weile später unermessliche Schwierigkeiten zu erdulden.

Eines Abends kam ich in der Dämmerung von einem Spaziergange aus dem Tiergarten zurück. Ich ging über die Linden nach meiner Wohnung in der Monbijoustrasse und gelangte endlich an die alte Kirche am Klosterplatz. Durch jenes Lichtmeer drüben war ich gekommen, und nun ging ich diese schmalen dunklen Gassen über den Platz. Gegenüber hing auf der hölzernen Balustrade eines Hauses Wäsche zum Trocknen. Auch vor andern Häusern hingen Hemden, die man trotz der Dunkelheit noch nicht abgenommen hatte. Vor einem Wirtshause sass an der Tür ein alter Israelit mit langem, weissen Backenbart. Da war ein Mietshaus, in welchem eine Treppe gleich nach oben in die Wohnungen führt, die andere Treppe in einen Schmiedekeller. Immer, wenn ich vor diesen 300 jährigen Ruinen stehe, welche hier zusammengedrängt erbaut wurden, wird mein Herz bedrückt. Das wievielste Mal ich jetzt hier war, weiss ich nicht. Aber auch jetzt bleibe ich eine Weile stehen. △ Nun ich weiter schreiten will, bemerke ich plötzlich an dem verschlossenen Kirchentor ein junges Mädchen, an den Torflügel gelehnt, leise weinend und schluchzend.—Vielleicht 16 oder 17 Jahre alt. Das Haar, welches unter dem Kopftuch hervorquillt, ist goldig hell. Das Kleid sieht nicht aus, als ob es unsauber und schmutzig ist. Das Gesicht, welches sich mir beim Klang meiner Tritte erschreckt zuwendet, kann ich unmöglich beschreiben, da ich kein Talent zum Romanschriftsteller habe.—Die grauen, reinen Augen! Fragend! Welche Qual spiegelt sich darin wieder. Sie sind von langen Wimpern bedeckt. Diese halb mit Tränen, gleichwie mit Tautropfen behangen!—

Warum dringt dieses Bild, nur einmal geschaut, bis auf den Grund meiner zurückhaltenen Seele?—

Ich denke, das Mädchen traf unerwartet ein tiefer Jammer!—So, dass sie alles um sich hier vergass, sich hinstellte und weinte!—Meine klein-

mütige Seele wird von einem mitleidigen Gefühl besiegt.—Leise gehe ich in ihre Nähe und sage: “Warum weinen Sie? Einem hier unabhängigen Fremden wird es leicht sein, Ihnen Hilfe zu bieten.”—Innerlich bewundere ich aber selbst meine Kühnheit!—△ Sie ist erstaunt und blickt in mein gelbliches Gesicht.—Jedoch, sie erkennt meine aufrichtige Seele in meinem Gesicht.—“Sie sehen aus—wie ein guter Mann—und werden nicht grausam sein—wie er—und—auch nicht—wie meine Mutter!” antwortet das Mädchen. Die auf einen Augenblick versiegte Tränenquelle bricht wieder hervor, überflutet die lieblichen Wangen. △ “Retten Sie mich!—damit ich kein schamloses Wesen werden muss!—Meine Mutter hat mich geschlagen,—da ich seinen Worten nicht gehorchte!—Mein Vater ist gestorben.—Morgen müssen wir ihn begraben—und im Hause ist kein Pfennig mehr!”—△ Weiter folgt nur Schluchzen.—

Nr.5 ; Ost=Asien, Nr.119, Jg.10-11, 1908, Mai

Meine Augen blicken starr auf die zitternde Stirn des gebeugten Mädchens.—△ “Ich werde Sie in Ihr Haus begleiten. Aber, zuerst beruhigen Sie sich. Sie dürfen niemanden Ihr Weinen hören lassen. Hier ist eine Strasse!”—Während meiner Worte nähert sie sich unbewusst meiner Schulter.—Plötzlich hebt das Mädchen den Kopf und als sie mich ansieht, wendet sie sich verschämt von mir ab.—△ Da es mir unangenehm wäre, wenn ich mit dem Mädchen zusammen gesehen würde, so folge ich nach.—Mit schnellen Schritten begibt sie sich in das Haus, gegenüber dem grossen Kirchentore, eine schon halb zerfallene Steintreppe empor. Oben vier Treppen ist eine Tür, durch welche man nur gebeugt gehen kann. Des Mädchens Hand zieht stark an einer Klingel, die von einem gebogenen rostigen Metallstück vorgestellt wird. Da ertönt von innen eine alte heisere Frauenstimme: “Wer ist da?” Kaum antwortet das Mädchen: “Elise kommt zurück!” Da wird die Tür wütend aufgerissen von einer alten Frau mit grauem Haar; obwohl sie kein hässliches Gesicht hat, so zeigt die Stirn doch tiefe Spuren von Sorgen und Kummer. Sie trägt eine abgetragene Pelzjacke und schmutzige Pantoffel. Elise grüsst mich und geht hinein. Sofort

schlägt die Tür heftig hinter der ungeduldigen Alten zu.—△Ich stehe bedrückt eine Weile still. Im Scheine der Oellampe erkenne ich auf einen Augenblick an der Tür die Aufschrift “Ernst Weigert”, dahinter “Schneider”. Es wird der Vatersname des Mädchens sein. Aus der Wohnung schallt eine zänkische Stimme; dann wird es still und die Tür öffnet sich wieder.—Die alte Frau ist es, entschuldigt sich höflich wegen der groben Behandlung und bittet mich, einzutreten.—Die Tür führt in die Küche; rechts ein niedriges Fenster, davor schneeweiss gewaschenes Leinen, links steht ein schlecht gebauter Ziegelherd. Die Tür der gegenüberliegenden Stube ist halb geöffnet. Im Innern sieht man ein Bett stehen mit einem weissen Tuche verhüllt.—

Auf dem Bette liegt der Tote!—

Die Ate öffnet eine Tür neben dem Herde und führt mich in eine Kammer; da diese eine Mansarde ist, so fehlt die Decke. Vom hinteren Dach im Winkel führt ein Balken schräg gegen das Fenster herunter. Er ist mit dickem Papier verklebt. Wenn man dort steht, streift der Balken den Kopf. Hier befindet sich ein Bett.—Den Tisch in der Mitte bedeckt eine nicht unschöne Decke. Darauf liegen einige Bücher und Albums. In einer Vase steckt ein mit dieser Umgebung kontrastierender, kostbarer Blumenstrauß!—

Daneben steht schüchtern das Mädchen. △Es ist ausserordentlich schön! Der Teint wie Milch und der Lampenschein fällt auf das rosige Gesicht. Die Hände und Füße sind winzig und fein.—Nichts ähnelt an die alte Frau dieser armseligen Behausung. Nachdem die Alte die Stube verlassen hat, sagt das Mädchen mit nicht ganz dialektfreier Aussprache: △ “Bitte, verzeihen Sie den Wahnsinn, Sie hierher mitgenommen zu haben. Sie werden ein guter Mann sein und mich nicht verachten. Der Vater muss morgen beerdigt werden! O, mein getäushtes Vertrauen auf Schaumberg!—Sie werden ihn nicht kennen. Er ist der Direktor des Viktoria-theaters. Da ich bereits seit zwei Jahren ein Engagement dort habe, so glaubte ich, dass er uns gern helfen würde!—Ich glaubte nicht, dass er meinen Jammer bei dieser Gelegenheit missbrauchen könnte.—Bitte, Herr, helfen Sie mir!—Das Geld werde ich zurückzahlen. Ich werde es von meinem geringen Gehalte abnehmen, ob auch

mein Körper entbehrt.—Doch—wenn es Ihnen nicht möglich ist, dann muss ich nach den Worten der Mutter handeln!”

Sie steht vor mir, mit nassen Augen und zitternden Gliedern. Diese schmeichelnden Augen—bittend aufgeschlagen, dass man nicht widerstehen kann!—Ist sie bewusst oder unbewusst, diese Augensprache?

Wohl habe ich in meiner Tasche noch einige Mark Silbergeld, jedoch dass es genügt um ihr zu helfen, ist unmöglich. So löse ich meine Taschenuhr von der Kette, lege sie auf den Tisch und erwidere: “Wollen Sie augenblicklich damit die dringendsten Bedürfnisse bestreiten? Wenn Sie später einen Boten vom Leihhaus in die Montbijoustrasse 3 senden und nach “Ota” fragen lassen, so wird das geliehene Geld zurückgezahlt werden.” △Sichtbar verwundert ist das Mädchen.—Meine Hand, welche ich ihr zum Abschied reiche, drückt sie an ihre Lippen und heisse, unstillbare Tränen fallen darauf nieder.—

Ach, was für eine traurige Fügung des Schicksals!—Das Mädchen ist selbst in mein Haus gekommen, um mir zu danken. Wie eine schöne Wunderblume steht es am Fenster in meinem Arbeitszimmer, wo ich sonst den Tag über lesend sitze, und mir gegenüber links die Büste Schopenhauers, rechts die Schillers steht.

Nr.6 ; Ost=Asien, Nr.120, Jg.10-12, 1908, Juni

Von dieser Zeit an entstand ein Freundschaftsverhältnis zwischen uns, das sich allmählich immer herzlicher gestaltete. Als meine Landsleute davon hörten, glaubten sie in ihrer Leichtfertigkeit, ich suche Liebe unter der Tänzerinnenschar. Aber—zwischen mir und Elise war es bei einem rein freundschaftlichen Verkehr geblieben.—△Mag es seinem Namen nur schaden, unter meinen Landsleuten war ein sehr indiskreter Mensch!—Er denunzierte mich bei meinem Bureaudirektor, schrieb ihm, dass ich mit Tänzerinnen Umgang hätte..... Mein Bureauchef, der bereits wusste, dass ich meinen früheren Studienplan nicht eingehalten hatte und der mir schon deshalb nicht gut gesinnt war, sagte endlich der Gesandtschaft seine Meinung über mich.

So wurde ich meiner Stellung enthoben; mein Titel wurde mir genommen. Als mir der Gesandte meine Entlassung mitteilte, fügte er hinzu: “Wenn Sie sofort in die Heimat zurückkehren, so stellen wir Ihnen das Reisegeld zur Verfügung. Wenn Sie jedoch noch hierbleiben wollen, so können Sie unmöglich auf weitere staatliche Unterstützung rechnen.”—In meiner Unentschlossenheit bat ich um eine Woche Bedenkzeit.

Nun überlegte ich hin und her, dieses und jenes!—Zur selben Zeit empfang ich zwei Briefe, die mich so tief betrübten, wie nie wieder etwas. Beide Schreiben trugen beinahe den gleichen Poststempel; —eins zeigte die Schriftzüge meiner Mutter. Das andere aber war von N. N., einem Verwandten, und berichtete ihren Tod!—Meine liebe, einzig geliebte Mutter!—Ich kann die Worte aus ihrem Briefe hier nicht wiederholen. Meine Tränen fliessen über, wenn ich daran denke und lassen mich den Pinsel nicht weiterführen.

Meine Freundschaft mit Elise war bis jetzt harmloser gewesen, als sie für andere erschien.

Elise hatte wegen der Armut ihres Vaters keine genügende Ausbildung erhalten. Erst 15 Jahre alt, wurde sie von einem Ballettmeister engagiert und lernte so diesen wenig ehrbaren Beruf. Als der Kursus beendet war, ging sie zum Viktoria-Theater.—Jetzt nimmt sie dort die zweite Stellung ein. Schon Hacklaender bezeichnet die Tänzerinnen als “moderne Sklaven!”—Vergänglichkeit ist ihr Los.—So ist Elise mit ganz geringem Gehalt angestellt. Am Tage muss sie zu den Proben und abends zur Vorstellung. Wenn sie ihre Garderobe im Theater betreten hat, dann muss sie sich schminken und in schöne Gewänder hüllen!—Aber ausserhalb des Theaters besitzt sie nicht selten genügend für den eigenen Lebensunterhalt. Wie schwer ist es da, wenn man noch für Eltern und Geschwister sorgen muss!—

Darum kommen, wie gesagt, viele Tänzerinnen auf Abwege. Elise hatte sich brav gehalten, wie es ihrem ruhigen, bescheidenen Wesen geziemte. Dazu der Schutz eines strengen Vaters. Elise liebte von ihrer Kindheit an Bücher. Sie bekam aber nur Kolportage-Romane aus einer Leihbibliothek in die Hände. Seit sie

mich kennen gelernt hatte, erhielt sie bessere Bücher von mir. Nach und nach fand sie an ihnen Gefallen. Sie verbesserte auch ihre Sprache. In kurzer Zeit wurden die Fehler in ihren Briefen an mich seltener. So bestand zwischen uns das Verhältnis des Lehrers zum Schüler.—

Als Elise von meiner unerwarteten Entlassung aus dem Amte hörte, wechselte sie aus Mitgefühl die Farbe, obgleich ich ihr verheimlichte, dass sie die Ursache gewesen wäre.—Sie sagte, ich müsste es ihrer Mutter verbergen. Sie befürchtete, sie würde mich lassen müssen, wenn meine Mutter erführe, mein Studiengeld sei verloren.—△ Ach, es ist unnötig, genau davon zu erzählen.—Aber—die Zeit war gekommen, dass meine Liebe mich hinriss.—

Wir wurden untrennbar.—Jetzt kam der grosse Wendepunkt meines Lebens. Meine ganze Existenz stand in Gefahr.—Dass ich dennoch diesen Schritt tat, darüber bin ich selbst verzweifelt.—

Ob auch Verleumder mir meine Freundschaft mit Elise nicht leicht machten, ich musste sie lieben; seit ich sie zuerst gesehen. Nun leidet sie mit mir zusammen. Vor dem Abschied ist ihr bange. Ihr gesenktes Auge, über den Schläfen hängt lose das Haar.—Diese liebliche Schönheit! Diese liebenswerte Gestalt!—Mein überreiztes Gehirn durchzuckt es.—

Ich kann es nicht mehr abwenden.—△ Der Tag kam näher, wo ich dem Gesandten meinen Entschluss mitteilen musste. Mein Schicksal drängt! Wenn ich in meine Heimat jetzt zurückkehre, so gibt es keine Gelegenheit mehr für mich, in der Welt vorwärts zu kommen. Unehre erwartet mich, weil ich mein Studium nicht zu Ende führte! Doch, bleibe ich hier, so gibt es keinen Weg für mich, das Studiengeld zu erlangen. △ Da half mir in der schweren Zeit Aizawa Kenkichi, mein jetziger Reisegefährte. Er war in Tokyo bereits Geheimsekretär bei dem Grafen Amakata. Er las meine Entlassung unter den öffentlichen Bekanntmachungen. Sofort sprach er mit dem Verleger einer Zeitung. Dieser ernannte mich zum Korrespondenten seines Blattes. Ich bleibe nun in Berlin und schreibe Berichte über Politik und Wissenschaft.

Nr.7 ; Ost=Asien, Nr.121, Jg.11-1, 1908, Juli

Wohl ist das Honorar, das ich von dem Blatte erhalte, kaum der Rede wert. Wenn ich aber meine Wohnung wechsele und das Restaurant, in dem ich sonst Mittag ass, meide, dann reicht es für mein geringes Leben aus. Soviel ich auch über alles nachdenke, diejenige, welche mir die grösste Treue zeigte, die Rettungsleine zugeworfen hat, war Elise.—Auf welche Weise sie die Mutter dazu zu bewegen wusste?—ich wurde in die Wohnung von Mutter und Tochter aufgenommen. Elise und ich konnten seit einiger Zeit zwar keine Reichtümer sammeln; aber obgleich es eigentlich ein trauriges Dasein war, verbringen wir trotzdem zusammen sehr glückliche Tage.—△ Morgens nach dem Kaffee geht Elise zur Probe oder an freien Tagen bleibt sie zu Haus. Ich gehe nach einer Lesehalle in der Königstrasse. Es ist ein Lokal mit engem Eingang, das sich schmal, aber sehr tief nach hinten ausdehnt. Dort lese ich sämtliche Zeitungen und Journale, sammle mir Stoff für meine Berichte, indem ich abschreibe oder mit dem Bleistift Notizen mache. Das Licht fällt von oben in den Raum durch ein offenes Klappfenster. Ich sitze Schulter an Schulter in einer Reihe mit stellungslosen jungen Leuten, mit Greisen, welche nur zu ihrem Vergnügen herkommen, sonst aber mit hohen Zinsen Geld den Leuten leihen, und mit Angestellten, welche ihre Brotherren an der Arbeitszeit bestehlen, um ihre Füsse auszuruhen. An dem kühlen steinernen Tisch schreibe ich emsig, so dass ich sehr beschäftigt erscheine. Ich beachte es nicht, dass die Tasse Kaffee, welche ein kleines Mädchen brachte, kalt wird. An die Wand, wo ältere unbenutzte Zeitungshalter und Zeitungen verschiedenster Art beieinander hängen, tritt fortwährend der Japaner hin!—Was werden darüber die unbekannten Menschen denken. Gegen 1 Uhr kommt dann Elise, an den Tagen, an welchen sie Probe hat, auf dem Rückwege herein und wir verlassen beide zusammen das Lokal. Dieses junge Mädchen, welches so aussergewöhnlich graziös tanzen kann—unter grossen Beifall—, wie werden ihm diese Leute mit Erstaunen nachgesehen haben.

Mein Studium vernachlässige ich.—Leise flak-

kert ein kleines Licht unter dem Dache. Seitlich am Tische schreibe ich an einem Manuskript für die Zeitung. Elise, welche aus dem Theater zurückgekehrt ist, sitzt auf einem Stuhle nährend dabei.

Meine Berichte sind ganz verschieden. Ich benutzte die gesammelten Notizen, auch uninteressante Themata über frühere Gesetze und Paragraphen verarbeite ich nebst Berichten über die lebhaft betriebene Politik, Kritik oder über Neuerscheinungen auf dem Gebiete der Literatur und Kunst.

Ich gebe mir dabei die grösste Mühe—und bemühe mich statt nach “Börne” lieber nach “Heine” zu lernen und meine Gedanken niederzuschreiben.—Verschiedene Aufsätze habe ich geschrieben, welche besonders ausführlich die Thronbesteigung des neuen Kaisers nach dem Tode Kaiser Wilhelms I. und den bald darauf erfolgten Tod Kaiser Friedrichs III. behandeln. Gleichfalls berichte ich ausführlich von dem Vorrücken und der Zurückdrängung des Fürsten Bismarck. Daher habe ich in dieser Zeit mehr zu tun, als ich früher angenommen hatte. Ich finde schwerlich Zeit, meine eigenen Bücher zu lesen und alte Arbeiten hervorzusuchen. Im Register der Universität bin ich noch nicht gestrichen. Jedoch fällt es mir schwer, das Honorar zu bezahlen. Darum belege ich nur eine Vorlesung und auch diese höre ich selten.—△ Ich vernachlässige mein Studium, aber eine Erkenntnis erwächst mir. Was mag es sein!—Was auch überall über Soziologie verbreitet wurde, so geschah es unter den verschiedenen europäischen Ländern doch am meisten in Deutschland. Unter den Diskussionen, welche in mehr als hundert verschiedenen Zeitungen und Journalen erschienen, waren sehr viele edele. Von dem Tage an, da ich Korrespondent geworden war, lese und lese ich fortwährend, schreibe und schreibe ich nur immer ab.—Da ich meinen Idealen treu geblieben war, welche ich auch früher beim Besuch der Universität gehegt hatte, so sind meine Kenntnisse, da ich bis jetzt nur einen geraden Weg verfolgt habe, in natürlicher Weise einheitliche geworden. Meine Kenntnisse erreichen die Grenze, von welcher unsere Studenten meistens im Traum kaum etwas ahnen. Unter ihren Genossen sind welche, die selbst die Artikel der deutschen Zeitungen nicht gut lesen kön-

nen.

Der Winter des 21. Jahres Meiji kam. Auf den Fuss- und Fahrwegen der Hauptstrassen ist es schmutzig, Sand und Schnee spritzen hoch auf. Aber in der Gegend der Klosterstrasse, auch an den holprigsten Stellen, ist alles fest gefroren. Wie traurig stimmt es, wenn man frühmorgens das Fenster öffnet und ein verhungertes Sperling liegt tot und starr auf dem Boden. Es ist doch nicht leicht, diese Kälte in Nord-Europa zu erdulden, welche durch die Steinwände der Häuser und durch die Wolle der Kleider dringt, auch wenn das Zimmer geheizt wird und auf dem Herde das Feuer brennt.

Vor einigen Tagen ist Elise auf der Bühne, während der Vorstellung, in Ohnmacht gefallen. Von einem Mann gestützt, kam sie heim. Seitdem fehlt sie, weil sie sich nicht wohl fühlt.

Nr.8 ; Ost=Asien, Nr.124, Jg.11-4, 1908, Okt.

So oft sie etwas isst, wird es ihr übel.—Ihre Mutter hat nun zuerst bemerkt, dass es Schwangerschaft bedeutet!—Ach—wenn es nicht dieses ist, so ist es schon mein unsicheres Schicksal!—Aber, wenn es wahr ist—was soll ich dann beginnen?—

Da heute ein Sonntagmorgen ist, bleibe ich zu Haus. Ich bin nicht fröhlich. Elise ist zwar nicht so krank, um in Bett liegen zu müssen, doch sie rückt ihren Stuhl dicht an den kleinen eisernen Ofen und bleibt wortkarg. Draussen im Flur ertönt eine Männerstimme, bald darauf bringt Elisens Mutter, welche in der Küche beschäftigt war, einen Brief und gibt ihn mir. Ich erkenne Aizawas charakteristische Handschrift. Die Briefmarke ist preussisch und trägt den Stempel “Berlin”. Ueberrascht reisse ich das Kuvert auf und lese: “Da alles eilig kam, konnte ich Dich nicht vorher benachrichtigen. Ich bin zusammen mit dem Minister Amakata gestern abend hier eingetroffen. Komme schnell, da der Graf sagte, dass er Dich einmal sehen möchte. Jetzt wird es an der Zeit sein, Deine Ehre wieder herzustellen. Da es sehr eilt, schreibe ich nur das Nötigste.” Elise sah, dass ich zu Ende gelesen hatte und ein bedrücktes Gesicht machte: —“Ist es ein Brief aus der Heimat?

—Enthält er auch keine schlechte Nachricht?”

—Sie dachte dabei an einen Brief jenes Zeitungsverlegers über Honorarangelegenheiten.—

“Nein—sei nicht ängstlich!—Aizawa, dessen Namen du schon kennst, kam mit dem Minister zusammen hierher und lädt mich zu sich ein. Weil er so eilig tut, werde ich jetzt sofort hingehen.” △—Keine Mutter kann sich mehr bemühen, wenn ihr einziger geliebter Sohn ausgeht, als Elise.—Sie wird geglaubt haben, dass ich vielleicht den Minister treffe; sie steht auf, ihr Unwohlsein bezwingend. Sie wählt unter den Oberhemden das weisseste aus. Dann holt sie den sorgfältig fortgehängten Gehrock, die Krawatte bindet sie mir selbst. △“Damit niemand sagen könnte, ich sei hässlich.—Sieh in meinen Spiegel! Warum machst du solch Gesicht? Ich möchte mit dir gehen.” Dann sagt Elise ernst: “Nein, wenn ich dich so fein gekleidet sehe, so will es mir scheinen, als ob du nicht mein Toyotaro wärest!—Aber mag auch der Tag kommen, dass du reich wirst—bitte—verlasse mich nicht.—Auch wenn mein Unwohlsein eine andere Ursache hat, als die Mutter meint.” △—“Reich werden?” Ich lächle darüber. “Seit mehreren Jahren schon habe ich die Hoffnung aufgegeben, jemals noch in politische Kreise kommen zu können. Ich will den Minister nicht sehen; ich will meinen Freund besuchen, von dem ich so lange getrennt war.” △—Der Taxameter, welchen Elisens Mutter gerufen hatte, kam bis unter das Fenster den glatten Schneeweg heraufgefahren.—Ich streife meine Handschuhe über, hänge meinen etwas schäbigen Ueberzieher nur über die Schultern, ohne ihn völlig anzuziehen; nehme meinen Hut und küsse Elise. Dann gehe ich die Treppe hinunter. Oben öffnet Elise das gefrorene Fenster, um meinen Wagen nachzusehen. Im kalten Wind weht ihr loses Haar; △vor dem Eingang zum Kaiserhof verlasse ich den Wagen und frage den Portier nach der Zimmer-Nummer des Geheimsekretärs Aizawa. Dann steige ich die Marmortreppe hinauf. Wie Lange ist mein Fuss ihrer entwöhnt! Ich bin auf dem oberen Vestibül. Hier steht zwischen Säulen ein Sofa, mit Plüsch bezogen, an der Wand hängt ein Spiegel. Hier lege ich meinen Paletot ab, gehe den Gang entlang und befinde mich vor dem Zimmer. Einen Moment zögere ich jedoch; mit welcher Miene wird mich

Aizawa heute empfangen? Hatte er nicht meine Lebensweise während der gemeinsam verlebten Studienszeit an der Universität äusserst gelobt? Nun trete ich zu ihm hinein und stehe ihm gegenüber.—Nur seine Gestalt ist grösser und stärker geworden, sonst ist er derselbe lustige Mensch wie früher. Es scheint nicht, als ob er über meine Verfehlungen viel nachdenkt. In der Freude des Wiedersehens haben wir auch keine Zeit, darüber weiter zu sprechen.—Ich wurde später dem Minister vorgestellt. Und er überträgt mir eine Uebersetzung. Ein deutsches Schreiben, das sehr eilig ist. Als ich es empfangen hatte und das Zimmer des Ministers verliess, kam mir Aizawa nach und sagte, er möchte mit mir zusammen Mittag essen.△Bei Tisch hat er dann viel gefragt, und ich habe viel geantwortet. Sein Leben war meistens ruhig verlaufen, dagegen mein Schicksal so wechselreich gewesen ist.—

Nr.9 ; Ost=Asien, Nr.126, Jg.11-6, 1908, Dez.&1909, Jan.

So hörte der Freund von dem unglücklichen Verlauf meines Lebens ; er wunderte sich öfters, doch tadelte mich nicht, sondern gab im allgemeinen den andern Leuten Schuld. Als ich mit meiner Erzählung zu Ende war, wurde seine Miene sehr ernst und er ermahnte mich : “Das Geschehene ist eigentlich durch Dein angeboren schwaches Herz gekommen. Deshalb hat es keinen Zweck, jetzt alles zu wiederholen.—Aber wissentlich und absichtlich darf man nicht dauernd aus Leidenschaft für ein Mädchen ein zielloses Leben führen! Graf Amakata hat jetzt nur die Absicht, Deine deutschen Sprachkenntnisse zu benutzen. Ich weiss, dass der Graf auch die Gründe deiner damaligen Entlassung kennt. Daher will ich nicht seine Entschlüsse beeinflussen, denn wenn er an Bevorzugung oder dergleichen denkt, so wäre dies unvorteilhaft für den Freund und bedeutete für mich auch einen Verlust. Zur Empfehlung eines Menschen ist es am besten, ihn zuerst seine Kenntnisse zeigen zu lassen.—Zeige sie—und erwirb Dir das Vertrauen des Grafen!—Das Verhältnis zu jenem Mädchen aber—obgleich sie dich aufrichtig liebt und diese Liebe eine so tiefe geworden ist, wird nicht ein Hemmnis für einen begabten Menschen sein. Diese Liebe ist dem Charakter der Ge-

wohnheit entsprungen. Entschliesse Dich, das Verhältnis zu lösen!”—In diesem Sinne machte er mir Vorhaltungen.△—Wie einem Schiffer, welcher sein Steuer im Ozean verlor und in der Ferne einen Berg erblickt, so erging es mir mit dem Ausblick auf eine Zukunft, auf die Aizawa meine Augen gerichtet hätte.—Aber—noch liegt dieser Berg vor mir im dichten Nebel. Es bleibt noch unklar, wann ich dorthin kommen werde und—ach—ob ich, wenn ich ihn wirklich erreiche, damit meine Seele zufrieden machen könnte!—Trotz der Armut gibt es in meinem jetzigen Leben doch Glückseligkeit—und Elisens Liebe kann ich nicht lassen.—In meinem wankelmütigen Herzen fasse ich keinen festen Entschluss. Doch im Augenblick gehe ich auf die Worte meines Freundes ein und verspreche ihm, das Verhältnis zu lösen.—Aber ich denke nicht daran, meinen Schatz zu lassen. Wenn ich gleich meinen Gegnern widerstehen kann, so meine ich doch, die Forderung meines Freundes sogleich nicht ablehnen zu können.

Als ich mich von ihm verabschiedet hatte und auf die Strasse heraustrat, wehte kalter Wind in mein Gesicht. Ich kam aus dem Speisesaal des Hotels, wo doppelte Glasscheiben gegen die Kälte schützten und im Innern des mächtigen Majolikaofens ein grosses Feuer lohte. Die Kälte jetzt gegen 4 Uhr nachmittags drang empfindlich durch meinen dünnen Paletot. Meine Haut griselte. Ebenso kalt war es mir ums Herz geworden.

Die Uebersetzung habe ich in der Nacht vollendet. In dieser Zeit gehe ich nun oft in den Kaiserhof. Zuerst betreffen die Gespräche mit dem Grafen nur meine Arbeiten. Späterhin erzählt er mir Begebenheiten aus der Heimat und fragt mich nach meinen Ansichten darüber. Zuweilen erzählt er auch von der Reise und von den Unschicklichkeiten, welche verschiedene Leute begingen, und er belächelt dieselben.

Ungefähr einen Monat später sagt eines Tages Graf Amakata plötzlich zu mir : “Ich werde morgen früh nach Russland abreisen. Wollen Sie mich begleiten?”—Ich hatte seit mehreren Tagen Aizawa nicht gesehen, da er von seinem Dienst sehr in Anspruch genommen war. So erschrek-

kte mich diese plötzliche Frage sehr.—“Warum sollte ich Ihrem Wunsche nicht nachkommen können?!”—

Ohne diese bejahende Antwort hätte ich meine Fehltritte eingestehen müssen! Meine Antwort geschah ohne Ueberlegung. Wenn mir von einem Menschen plötzlich eine Frage gestellt wird und ich demselben vertraue, dann muss ich antworten ohne zu überlegen, ob ich die rechte Antwort gebe. Nach meiner Zusage erst besann ich mich, dass ich ihr schwerlich nachkommen könnte. Doch müsste ich alles geduldig tragen, und mich zwingen, meine ehemaligen unüberlegten Fehler zu verdecken.—△ Der Graf gab mir an diesem Tage das Honorar für die Uebersetzungen und zugleich Reisegeld. Ich kehre damit nach Hause zurück. Das Geld für die Uebersetzung gebe ich Elise. Sie soll damit alle Ausgaben bestreiten bis zu meiner Rückkehr aus Russland.—Der Arzt hat ihr jetzt gesagt, dass ihr Zustand kein gewöhnlicher mehr sei!—Infolge ihrer grossen Blutarmut hätte es sich nicht vor einigen Monaten bereits feststellen lassen.—Da Elise so lange dem Theater fernblieb, benachrichtigte sie der Direktor, dass ihr Name bereits dort gestrichen sei. Trotzdem sie kaum einen Monat fehlte, wird so streng vorgegangen. Doch es ist dem Kontrakt gemäss so üblich.—Es scheint nicht, dass Elise über meine Reise sich sehr grämt—denn sie glaubt fest an mein treues Herz.

Es sind keine grossen Vorbereitungen zu meiner Reise notwendig, da das Reiseziel nicht sehr entfernt ist. Einen passenden schwarzen Rock leihe ich mir, kaufe einen Gothakalender, das Verzeichnis adliger Familien mit Angaben der Stammverzweigung des russischen Kaiserhauses; auch einige Wörterbücher stecke ich in meinen kleinen Reisekoffer.—

Wirklich, in letzter Zeit geschehen traurige Dinge,—es wird für Elise zu traurig sein, nach meinem Abschied allein im Hause zu bleiben. Wenn aber Elise mit zum Bahnhof kommt und dort Tränen vergiesst oder etwas anderes beginnt, wird es peinlich sein. Deshalb schicke ich sie früh am nächsten Morgen mit ihrer Mutter zu Bekannten. Dann ordne ich meine Reiseeffekten, verschliesse die Tür, gebe den Schlüssel beim Schuhmacher, welcher unten am Eingang

wohnt, ab und gehe fort.

Was soll ich von der Russlandreise erzählen!—Meine Stellung als Dolmetscher hat mich plötzlich in den Himmel empor gehoben! Während der Reise mit dem Minister und während des Aufenthalts in Petersburg umgibt mich die wunderbare Pracht des Zarenpalastes! Der allergrösste Luxus von Paris ist an diesem Ort des Eises und Schnees gebracht worden.—Welchen strahlenden Glanz verbreiten die Orden, gleich märchenhaft funkelnden Sternen; und die Goldschnüre der Epauletts blitzen. Man hat absichtlich das Licht von vielen gelben Kerzen anderer Beleuchtung vorgezogen. Welcher Glanz sprüht auf von den Fächern der Hofdamen, wenn sie sie entfalten und sich fächeln; die Kälte durch das Feuer im Kamin ganz vergessend. Dieser ist ein Kunstwerk seiner Art, die grössten Künstler müssen ihre Kraft an ihm erschöpft haben.

Ich beherrsche von allen die französische Sprache am fliessendsten, darum muss ich auch meistens die Unterhaltung zwischen den verschiedenen Pelsöichkeiten und uns führen und selbst die meisten Angelegenheiten erledigen.

Doch ich habe darum Elise nicht vergessen. Nur—weil sie jeden Tag mir Nachricht sendet, konnte ich sie nicht vergessen?!—

Als sie am Tage meiner Abreise so ungewohnt allein beim Scheine der Lampe gesessen hätte, da wär das sehr traurig gewesen. Jetzt bliebe sie lieber immer bis in die Nacht hinein bei Bekannten; und erst, wenn sie sehr ermüdet sei, kehre sie heim und lege sich sofort schlafen. Wenn sie dann am nächsten Morgen aufwache, glaube sie, es wäre nur ein Traum, dass sie allein sei. Wie traurig sei es nachher, wenn sie aufgestanden wäre! Solche Gedanken wie jetzt, hätte sie früher nie gehegt, wenn wir auch wegen unseres ärmlichen Lebens und wegen des täglichen Brotes gejammert hätten. Dies war der Hauptinhalt des ersten Briefes.—

Nr.10 ; Ost=Asien, Nr.127, Jg.11-7, 1909, Feb.

Auch den späteren Brief wird sie in tiefen Gedanken geschrieben haben. Den Brief beginnt sie mit dem Worte “Nein”.

“Nein, jetzt erst habe ich einen Begriff be-

kommen, wie sehr ich Dich aus tiefstem Herzensgrunde liebe! Da mein Geliebter in der Heimat keine trauliche Familie besitzt, so würde es für ihn nicht unmöglich sein, dauernd hier zu bleiben, wenn sich an diesem Orte eine gute Position bietet. Auch mit meiner Liebe muss ich Dich doch festhalten können. Da es aber nicht ausgeschlossen ist, dass Du selbst gern nach dem Osten zurückkehren möchtest, so ist es leicht, dort mit meiner Mutter zusammen huzugehen. Nur das viele Reisegeld! Woher sollen wir es nehmen. Ich habe immer daran gedacht; mit irgend einer Arbeit mich zu ernähren und allein hier zu bleiben; bis Du in der Welt vorwärts gekommen wärest! Nun, schon 20 Tage nach unserm Abschied zu Deiner kleinen Reise wächst meine Sehnsucht nach Dir täglich. Es war ein Irrtum bei der Trennung, dass ich glaubte, es würde nur ein augenblicklicher Schmerz für mich sein. Und da mein Zustand allmählich bemerkbar wird—was sich für Dich inzwischen auch ereignen mag—bitte ich Dich, verlass mich nicht! Ich habe mich sehr mit meiner Mutter gezankt. Sie hat jedoch ihre Meinung geändert, als sie meinen nunmehr unumstösslichen Entschluss erkannt hat. Sie sagt, dass sie zu einem entfernten Verwandten, einem Bauer bei Stettin gehen würde, an dem Tage, da ich nach Osten fahre. Wenn der Minister Dich ferner protegiert, so wird sich mein Reisegeld erschwingen lassen. Jetzt will ich nur warten, bis mein Geliebter nach Berlin zurückkommt !”—

Ach, nachdem ich diesen Brief gelesen habe, bin ich erst über meine jetzige Stellung klar geworden. Ich muss mich wegen meines abgestumpften Herzens schämen. Ich rühmte mich selbst meiner jetzigen Lage und sogar vor anderen.—Ich glaubte, meine bisherige Entschlossenheit stehe fest, und doch bewährt sie sich nur im Glücke, nicht im Unglücke. Sobald ich die Beziehungen zwischen mir und den andern klar stellen will, wird die Hoffnung in meines Herzens Grunde getrübt.△ Der Minister hat mir jetzt sein volles Vertrauen zugewendet. Doch meine Gedanken bewegten sich nur um meinen Posten. Gott allein weiss es! Ich habe überhaupt nicht entfernt daran gedacht, dass sich meine Zukunftshoffnungen damit verknüpfen liessen.

Diese Erkenntnis kam erst jetzt; wie kann mein Herz dabei noch kalt bleiben!—Als mich mein Freund zu überreden versuchte, war des Ministers Vertrauen mir wenig sicher, wie ein Vogel auf dem Dache! Aber jetzt darf ich glauben, dass ich es mit erworben habe.

Nun verstehe ich auch Aizawas damalige Worte: “Wenn du in die Heimat zurückkehrst und der Minister dir fortgesetzt sein Vertrauen zuwendet usw....”

Diese Frage wird zuerst der Minister selbst an Aizawa gestellt haben; da es jedoch im Amt geschah, so hat er es mir nicht offen gesagt. Wenn ich bedenke, wie leichtsinnig ich ihm versprach, das Verhältnis mit Elise zu lösen. Und er wird es dem Minister schon mitgeteilt haben.△ Anfangs, nachdem ich nach Deutschland gekommen war, glaubte ich, dass mein Hauptziel verstanden wird. Ich hatte es mir zugeschworen, nicht einer Maschine gleich zu werden.—Aber mein Schicksal war das eines in die Freiheit gelassenen Vogels, dessen Füsse gefesselt sind und der nur seine Flügel gebrauchen kann, um empor zu kommen. Die Kette am Fuss ist ihm unmöglich zu lösen. Ein Bureauchef im Ministerium hat sie mir früher geschlossen. Der Schlüssel liegt in der Hand des Grafen Amakatas!

Es war gerade der 1. Januar als ich mit dem Minister zusammen wieder in Berlin eintraf. Ich verabschiedete mich sofort am Bahnhof und jagte in einer Droschke nach Hause. Es ist hier Brauch, die Sylvesternacht hindurch aufzubleiben. Am andern Morgen schläft sich jeder aus und in den Häusern geht es still zu. Die Kälte ist streng, der Schnee auf den Wegen ist fest und holprig gefroren und glitzert und flimmert im hellen Sonnenlicht. Der Wagen ist in die Klosterstrasse eingebogen, jetzt hält er vor dem Eingang des Hauses. Ich höre, wie oben ein Fenster geöffnet wird, aber ich kann es nicht sehen. Als ich mit dem Kutscher, welcher den Reisekoffer trägt, die Treppe emporsteige, begegne ich Elise, die mir entgegen kommt. Sie schreit auf und fällt mir um den Hals. Der Kutscher sieht es mit verwundertem Gesicht und murmelt etwas in den Bart.

Nr. 11 ; Ost = Asien, Nr. 128, Jg. 11-8, 1909, März

“Endlich bist du glücklich wiedergekommen! Wenn du nicht gekommen wärest, wäre mein Leben zu Ende !” ∟ Mein Herz ist jetzt zu nichts entschlossen ; sehnsüchtige Gedanken an die Heimat und Ruhmsucht verdrängen zuweilen die Liebesgedanken. Doch jetzt im Augenblick sind alle andern Gedanken vergessen! Ich umarme Elise, ihr Kopf lehnt an meiner Schulter und Freudentränen perlen auf meinen Arm.

Der Kutscher, welcher eben mit dröhnender Stimme gefragt hatte : “Wie hoch soll es hinauf gehen”, läuft voraus und steht schon oben auf der Treppe.

Ich gebe Elisens Mutter, die mich unter der Tür empfängt, Silbergeld, den Kutscher zu entlohnen ; und von Elisens Hand gezogen, trete ich rasch in die Stube. Meine Augen durchschweifen dieselbe und im Augenblick bemerke ich mit Staunen weissen Stoff und weisse Spitzen aufgehäuft auf dem Tische liegen.

Elise zeigt lächelnd darauf hin.

“Was denkst du dir dabei?! Dieses sind meine Herzenssorgen!”

So sprechend hebt sie ein Stück weisses Leinen empor und ich sehe, dass es ein Kinderhemdchen ist.

“Denke daran, wie fröhlich mein Herz sein muss. Das erhoffte Kind wird dir ähnlich sein und schwarze Augen haben, wie du!—Deine schwarzen Augen! Ach! ach!, was ich nur immer im Traume sah, waren deine schwarzen Augen.—An dem Tage, da es geboren wird, wirst du mit deinem ehrenhaften Charakter nicht zulassen, dass es einen andern Namen erhält, als den deinen !”

Tiefer neigt sich ihr Kopf an meiner Brust.—“Willst du lächeln und meinen, es sei jetzt zu spät dazu?!—Wie fröhlich wird der Tag für uns sein, wo wir in die Kirche treten.”—Ihre nun zu mir aufgeschlagenen Augen füllen sich mit Tränen.

Einige Tage wagte ich nicht den Minister zu besuchen, ich nahm an, er würde noch von der Reise angegriffen sein.—Ich habe während dieser Zeit das Haus nicht verlassen.

Eines Abends werde ich durch einen Boten zu ihm gerufen. Sofort begeben sich mich hin. Unsere Unterhaltung war dann eine besonders lebhaft und gute. Noch eben hatte mich Graf Amakata betreffs meiner Bemühungen auf der Russland-Reise gelobt.—“Sind Sie nicht gewillt mit mir nach Osten zu fahren? Ich kann zwar Ihre wissenschaftlichen Fähigkeiten nicht beurteilen, doch schon mit Ihren Sprachkenntnissen werden Sie der Welt nützen. Ich habe auch Aizawa gefragt, ob Sie nicht verschiedene Anhängsel hier hätten, da Ihr Aufenthalt hier zu lange währte. Doch als ich hörte, dass Sie nichts hier bindet, war ich beruhigt.”

So sprach Graf Amakata zu mir!—Seine grosse Gemütsruhe konnte ich unmöglich jetzt durch ein “Nein!” stören. Ich bin furchtbar erschrocken, aber ich kann doch nicht eingestehen, Aizawas damaligen Worten zuwider gehandelt zu haben!

Wenn ich jetzt des Ministers helfende Hand nicht ergreife, bin ich dem Vaterlande verloren und der Weg zur Wiederherstellung meiner Ehre ist auf immer abgeschnitten. Gedanken entstehen in meinem Hirn ; ich sehe meinen Körper im Geiste schon in dem Menschenstrome der grossen Weltstadt, in diesem ungeheuren Europa untergehen! Ach, welches wankelmütige Herz!

“Ich babe zugesagt!”

Ob ich auch eine eiserne Stirn habe—was soll ich zu Elise sagen, wenn ich nach Hause komme. Die Verwirrung und Verstörtheit meiner Sinne lässt sich unmöglich beschreiben.

Ich unterscheide nicht die Richtung des Weges, den ich dann einschlage, weder Ost noch West Versunken in trübe Gedanken, aus denen mich nur oft Scheltworte der Kutscher vorüberfahrender Wagen wecken. Erschreckt springe ich dann zur Seite.

Als ich mich endlich nach langer Zeit zufällig umsehe und meine Umgebung betrachte, befinde ich mich an einem Ende des Tiergartens. Auf eine am Seitenwege stehende Bank setze ich mich nieder und breche zusammen. Der Kopf fällt hinten über die Lehne, er brennt wie Feuer und pocht wie von Hammern geschlagen.

Wie viele Stunden habe ich hier wohl zugebracht, in dem halbtoten Zustande?—Als ich wieder zu mir kam, von Mark und Bein durch-

dringender Kälte geweckt, war es bereits Nacht. Der Schnee fällt dicht. Auf der Krempe meines Hutes und auf den Schultern des Mantels hat sich der Schnee zollhoch angehäuft. △ Es wird 11 Uhr vorüber sein. Die Gleise der nach Moabit und Karlstrasse führenden Pferdebahn sind verschneit. Nur die Gaslaternen unten am Brandenburger Tor werfen ihr einsames Licht auf den Weg.

Als ich mich erheben will, sind meine Beine ganz erstarrt. Ich reibe sie mit beiden Händen und ich kann kaum laufen. △ Da ich mit meinen Schritten nur langsam vorwärts komme, ist wohl Mitternacht längst vorbei, als ich in der Klosterstrasse ankam. Ich kann mich nicht besinnen, wie und auf welchen Wegen ich endlich bis zu dieser Stelle gekommen bin.

Nr.12 ; Ost=Asien, Nr.129, Jg.11-9, 1909, Apr.

Es war eine Nacht anfangs Januar. In den Restaurants und Cafés Unter den Linden blühte wohl noch lebhaft der Verkehr. Doch ich habe davon nichts wahrgenommen.

Mein verwirrtes Gehirn füllt nur der einzige Gedanke—dass ich ein Verbrecher bin und keine Verzeihung zu erhoffen habe!

Unter dem Dache, im vierten Stock, scheint Elise noch nicht zu schlafen. Ein glänzender Lichtschein, wie ein Stern, ist dort in der dunklen Nacht deutlich zu erkennen. Zuweilen verdecken ihn fallende Schneeflocken, sie schimmern wie Flaumen des Silberreihers; das Licht ist bald entschwunden, bald taucht es wieder auf. Als ob es mit Wind und Schnee neckisches Spiel triebe.

Nun, da ich in den Hausflur hineintrete, überfällt mich eine grosse Müdigkeit. Ich kann mich kaum noch aufrecht halten. Meine Glieder schmerzen und nur mit Anstrengung krieche ich die Treppe hinauf. Durch die Küche gehe ich nach der Stubentür, öffne und trete ein. Elise, die am Tische sitzend, an einem Hemdchen genäht hatte, wendet sich nach mir um. "Ach!" schreit sie auf "Was hast du getan? Wie siehst du aus?"—

Sie hat recht, dass sie sich wundert!—

Mein Gesicht ist weiss, wie das eines Toten ;

meinen Hut habe ich unterwegs verloren ; mein Haar ist zerzaust. Oft bin ich auf dem Heimweg ausgeglitten und gefallen, davon ist mein Anzug voller Erde und schmutzigem Schnee und an einigen Stellen zerrissen.—△ Ich will Antwort geben, doch meine Stimme versagt.—Meine Knie zittern, ich kann nicht länger stehen, ich will nach einem Stuhle greifen—

Nur soweit erinnere ich mich noch meines damaligen Zustandes, dann war ich zu Boden gesunken.—

Erst nach einigen Wochen kam ich wieder zum Bewusstsein. Ich hatte in hohem Fieber gelegen und im Wahn viel phantasiert.—

Elise hatte mich in aufopferndster Weise gepflegt. Eines Tages war dann Aizawa zum Besuch gekommen und nun wusste er alles, auch das, was ich ihm bis dahin verschwiegen hatte. Trotzdem meldete er dem Minister nur meine Erkrankung und regelte alle Angelegenheiten für mich in bester Weise. Ich sah bei meinem ersten Erwachen Elise an meinem Bette sitzen und erstaunte über ihr verändertes Aussehen.—Sie ist in diesen wenigen Wochen sehr abgemagert. Ihre rotumränderten Augen liegen tief in den Höhlen. Die grauen Wangen sind hohl.—Durch die Hilfe Aizawas brauchten wir zwar keinen Mangel am täglichen Brot leiden.—Jedoch, dieser Wohltäter tötete Elisens Geist!—△ Wie ich später hörte, vernahm Elise durch Aizawa das Versprechen, welches ich ihm damals gab. Sie wusste auch von meiner Zusage, die ich an jenem Abend dem Minister gab.—

Und dann eines Tages ist sie plötzlich von ihrem Sitze aufgesprungen, das Gesicht erdfahl!—"Du! mein geliebter Toyotaro!—hast mich so betrogen!"—schreit sie und fällt um.—

Aizawa ruft ihre Mutter und gemeinsam heben sie Elise auf das Bett. Nach einer Weile kehrt das Bewusstsein zurück!—Doch—ihre Augen blicken weit und starr, sie erkennt keinen der Umgebenden mehr!—Nur meinen Namen schreit sie wieder und wieder und beschimpft mich fürchterlich!—Sie zerrauft sich das Haar, beisst wütend in die Betten—und stellt dann plötzlich wieder klare Fragen, als ob sie gesund wäre. Alles, was die Mutter ihr reicht, wirft sie fort. Nur ein Kinderhemdchen, das auf dem Tische

lag und man ihr gab, betrachtet sie lange, birgt das Gesicht hinein und Tränen entquollen ihren Augen.—

Seitdem tobt sie nicht mehr, doch ihr Geist bleibt gestört, ihr Gedächtnis ist verschwunden. Sie ist so hilflos und kindisch wie ein Baby. Der Arzt, welcher Elise beobachtet, sagt dass sie am sogenannten Pliossium-Wahnsinn leidet. Die Krankheit ist eine Folge von Ueberanstrengung und plötzlichem grossen Kummer. Es ist fast keine Hoffnung auf Genesung vorhanden.—

Als wir sie in die Irrenanstalt nach Dalldorf bringen wollen, schreit sie, weint und widerstrebt. Das Kinderhemdchen aber lässt sie nicht von sich, immer wieder betrachtet sie es mit bebender Brust und unter Stöhnen. Von meinem Krankenlager will sie sich nicht trennen, aber doch sind ihre Gedanken nicht bei mir. Elise spricht unzusammenhängende Worte; schreit “Medizin!—Medizin!”

Ich bin von meiner Krankheit endlich genesen. Wie oft habe ich beim Abschied die lebende Leiche—Elise—umarmt und unzählige Tränen vergossen!—Ehe ich mit dem Minister zusammen die Heimreise nach Osten antrat, beriet ich mit Aizawa über Elise. Ich deponierte für Elisens Mutter ein Kapital, dessen Zinsen völlig für deren einfache Lebensbedürfnisse ausreichen. Ich bat diese, sofort an mich zu schreiben, wenn das Kind geboren wird, das unter dem Herzen des armen irren Mädchens atmet.—△Ach, es ist gewiss in der Welt kein besserer Freund als Aizawa zu finden, und doch ist er derselbe Mensch, für den bis jetzt nur Gedanken des Hasses meinen Kopf erfüllten.

Ende!

【引用文献・参考文献】

日本語文献は著者・編者の五十音順に、欧文献は著者・編者のアルファベット順に配列してある。ただし日本語文献の内、森鷗外『舞姫』の翻訳・現代語訳に関しては、出版年順に配列した。

1：日本語文献

五十嵐栄吉

1918（大正7）『大正人名辞典』（東洋新報社）、1987年に日本図書センターより復刻。

石附実

1992（平成4）『近代日本の海外留学生史』（中央公論社・中公文庫）

泉健

2001（平成13）「書評：Brenn, Wolfgang. Goerke, Marie

-Luise hrsg., Berlin-Tôkyô:im 19. und 20. Jahrhundert. Berlin, Springer Verlag, 1997.」『音楽学』46巻3号 pp.171-173.

2002（平成14）『『Ost=Asien』研究～その1.全目次』『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第52集、pp.107-204.

2003（平成15）『『Ost=Asien』研究～その2.人名注解；外国人編』『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第53集、pp.33-71.

2004a（平成16）『『Ost=Asien』研究～その3.人名注解；日本人編』『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第54集、43-79.

2004b（平成16）『『Ost=Asien』研究～その4.全目次；独語版』『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第54集、81-179.

2004c（平成16）「百年前のベルリンと曾祖父」『邦楽ジャーナル』Vol.215、12月号p.21.

2005a（平成17）「ベルリンの玉井喜作」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第55集、pp.27-50.

2005b（平成17）「玉井喜作記念館」（W.W.Web）<http://www2u.biglobe.ne.jp/~izumi/>

2006（平成18）「文献に見る玉井喜作—没後100年を記念して—」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第56集、25-47.

2007（平成19）「光市文化センターと玉井喜作」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第57集、pp.23-37.

稲村徹元他編

1973（昭和48）『大正過去帳 物故人名辞典』（東京美術）

イルメラ・日地谷＝キルシュネライト

2006（平成18）「明暗の境界：日本文学作品内のベルリン」『東京—ベルリン/ベルリン—東京展』（森美術館編）pp.26-29.

江村洋

1982（昭和57）「日本留学史におけるドイツ体験」『国文学』27巻10号、pp.38-46.

老川正行

1899（明治32）-1924（大正13）『老川家元祖ヨリ累代記録』（私家版）。2006年秋より光市文化センターに寄託。

岡田晃

1997（平成9）「軍艦を貰った男」『日本医事新報』1月No.3793

2005（平成17）「明治期 日独交流に貢献した北陸人—老川茂信氏—」北潟克輔編『北陸における日独交流の先覚者—顕彰—』（北陸日独協会）pp.12-17.

蒲生芳郎

1982（昭和57）「鷗外研究の現在」『国文学』27巻10号、pp.88-89.

上村直己

2001（平成13）『明治期ドイツ語学者の研究』（多賀出版）

グラツァー,D.,グラツァー,R.,（安藤実・斎藤瑛子訳）

1986（昭和61）『ベルリン・嵐の日々1914-1918』（有斐閣）原著は1983年刊

小池堅治

1926（昭和1）『表現主義文学の研究』（古今書院）、ゆまに書房の「海外新興芸術論叢書シリーズ」の1冊として2003年に復刊。

斎藤茂吉

1953（昭和28）「盗難記」『斎藤茂吉集』（筑摩書房）pp.394-403.

重松泰雄

1982（昭和57）「『舞姫』諸説集成」『国文学』27巻10号、pp.124-138.

週刊朝日編

1982（昭和57）『続・値段の明治大正昭和風俗史』（朝日新聞社）

田口卯吉

1886（明治19）『大日本人名辞書』（経済雑誌社）、1974年に講

談社より1937年の第11版を復刻。1980年には講談社学術文庫にも収録、全5巻。

田代光雄

1929 (昭和4)「伯林に於ける辻教授」『ゲルマニア・故辻教授追悼号』(東京外国語学校独語部・ゲルマニア会) pp.81-86.

手塚晃・石島利男編

2003 (平成15)『幕末・明治期 海外渡航者人物情報事典』(雄松堂出版:CD-ROM版)

富田仁

2005 (平成17)『新訂増補 海を越えた日本人名事典』(日外アソシエーツ)

長谷川泉

1991 (平成3)『長谷川泉著作選① 森鷗外論考』(明治書院)

1992 (平成4)『長谷川泉著作選② 森鷗外論考 涓滴』(明治書院)

1993 (平成5)『長谷川泉著作選④ 鷗外文献集纂』(明治書院)

平井正

1981 (昭和56)『ベルリン 1923—1927 虚栄と倦怠の時代』(せりか書房)

1982 (昭和57)『ベルリン 1928—1933 破局と転換の時代』(せりか書房)

1985 (昭和60)『ベルリン 1918—1922 悲劇と幻影の時代』(せりか書房)

船越光之丞述・関野直次編

1934 (昭和9)『日独国交断絶秘史』(日東書院)

平凡社編

1937 (昭和12)『新撰大人名辞典』、1979年に平凡社より復刻、全7巻。

前田愛

1982 (昭和57)「BERLIN 1888」『都市空間のなかの文学』(筑摩書房) pp.213-249、初出『文学』1980年9月号

森鷗外

1890 (明治23)「舞姫」『国民の友』第6巻69号

森鷗外・Eastlake, F.W. 訳 (英語)

1894 (明治27)“My Lady Of The Dnace”『日本英学新誌』No.44-55, 1-6月号。後にSir Edwin Arnold編で1907年(明治40)に彩雲閣より再刊。

森鷗外・二葉亭四迷訳 (露語)

1908 (明治41)「踊り子」“VOSTOK”No. 1, 2.

森鷗外・宇佐美濃守訳 (独語)

1908-09 (明治41-42)“Die Tänzerin”“Ost = Asien” No.115-129 (全12回)

森鷗外・小池堅治訳 (独語)

1917 (大正6)『独文 舞姫 倫敦塔』(南江堂)。後に小池堅治訳『独和对照鷗外小品』(郁文堂書店、1930/昭和5)にも収められている。

森鷗外・井上靖訳

1982 (昭和57)『舞姫 雁』カラー・グラフィック明治の古典8 (学習研究社)。後に山崎一穎監修『現代語訳 舞姫』として2006年(平成18)に筑摩文庫で再刊。

森鷗外・安川里香子訳

2001 (平成13)『現代訳 森鷗外「舞姫」』(審美社)。鷗外自筆「舞姫」草稿全文(鷗外記念本郷図書館所蔵)と『国民の友』付録「舞姫」原文が付いている。

森鷗外・小泉浩一郎他校注

2004 (平成16)『新日本古典文学大系明治編25森鷗外集』(岩波書店)。含「舞姫」「うたかたの記」「文づかひ」「即興詩人」(抄)。

森美術館編

2006 (平成18)『東京—ベルリン/ベルリン—東京展』

山口昌男・前田愛

1982 (昭和57)「舞姫」の記号学』『國文学』27巻10号、pp. 6-28.

ロータース, E. 編

1995 (平成7)『ベルリン 芸術と社会 1910-1933』(岩波書店) 原著は1982年刊

渡辺實

1977-78 (昭和52-53)『近代日本海外留学生史』(上下)(講談社)

和田博文他

2006 (平成18)『言語都市・ベルリン 1861-1945』(藤原書店)

2 : 欧文学文献

Anonym

1910“Die Entwicklung der Deutsch-Japanischen Gesellschaft (Wa-Doku-Kai) in der ersten zwanzig Jahren ihres Bestehens” in : Mitteilungen der Deutsch -Japanischen Gesellschaft (Wa-Doku-Kai) Jg.3 Nr.12, s.93ff.

Brenn, Wolfgang. Goerke, Marie-Luise. hrsg.

1997“Berlin-Tōkyō : im 19. und 20. Jahrhundert” Berlin, Springer Verlag.

Haasch, Günther. hrsg.

1996“Die Deutsch-Japanischen Gesellschaften 1888-1996.” Berlin : Wissenschaftsverlag Volker Spiess.

Hartmann, Rudolf

1997“Japanische Studenten an der Berliner Universität 1870-1914.” Berlin, Mori-Ōgai-Gedenkstätte der Humboldt-Universität zu Berlin.

Hoppner, Inge., Fujiko, Sekikawa. hrsg.

2005“Brückenbauer.” Berlin, Tokyo : Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin, Japanisch-Deutsche Gesellschaft.

Landesbildstelle Berlin (Photographien)

1998“Alt-Berliner Photoalbum.” Berlin, Nicolaische Verlagsbuchhandlung.

Zille, Heinrich

2004“Das alte Berlin : Photographien 1890-1910.” München : Schirmer/Mosel

【付記】

本稿に引用した斎藤茂吉の文章「盗難記」の所在に関しては、老川茂信を大伯父とする老川伸氏にご教示いただいた。同書からの引用の際、漢字は現代表記に直した。また老川正行著『老川家元祖ヨリ累代記録』は、同じく老川伸氏によって、2006年秋から光市文化センターに寄託されている。同所には、玉井喜作の一次資料のほとんどすべてが収められている。これによって、玉井の後を継いで“Ost = Asien”を刊行し続けた老川茂信の家系の基本資料も、同所で見る事が出来るようになった。このことは、“Ost = Asien”と“Japan und China”の研究にとって画期的な出来事であり、改めて老川伸氏に深謝の意を表する次第である。